

古代における塔型建築物の伝播

—ボロブドゥールと奈良頭塔の関係について—

坂井 隆

1 はじめに 2 頭塔と関連遺構のあり方 3 塔型建築物の伝播 4 ボロブドゥールの位置 5 インドネシアの石積基壇遺構 6 アジア東部の古代海上交流と仏教伝播 7 まとめ—交流の意味

論文要旨

奈良時代の特殊塔と言われる奈良市頭塔・堺市大野寺土塔・岡山県熊山石積遺構は、いずれも水平方向を強調する階段状ピラミッドの形態を呈して内部空間を持たず、通常の日本での仏塔のイメージとは大きく異なっている。しかし頭塔には数多くの仏像レリーフが配置されるなど、仏教と密接な関係にあることは確かである。本稿は、この特殊塔の起源を考察したものである。

仏塔は紀元前3世紀にインドで生まれ、仏像誕生以前の仏教徒にとって中心的な礼拝対象だった。最古のサーンチー塔のように、その形態は半球形を中心とし、周囲を巡る礼拝を前提として築造された。その後仏教の各地への伝播の中で、それぞれの地域で仏塔の形態は多様な姿を見せる。

インドネシアのボロブドゥールは世界最大の仏教遺構と言われ、シャイレンドラ王朝の下で8世紀後半から半世紀以上かけて築かれた。そこに現された多数の仏像やレリーフは、スリランカや東インドで発達した華嚴経や密教の要素を示している。

しかしボロブドゥールの階段状ピラミッド形態はインドやスリランカでは見出されず、また同様の仏塔は東南アジアでもボロブドゥールが最古である。だが似たものは、巨石文化の山岳信仰から誕生した在来の石積基壇遺構に見ることができる。ボロブドゥールは、それを仏教的に飾りたてた巨大遺構だった。

唐での華嚴宗の成立や密教の確立には、東南アジア経由で旅行した僧侶たちが重要な役割を果たしている。そのため奈良で栄えた華嚴宗・密教には、インドネシア在来の山岳信仰が混入した可能性が高い。本稿では、その過程で生じたボロブドゥールと頭塔などの類似を検討し、遠距離文化接触の興味深い具体像を明らかにしたい。

キーワード

対象時代：古代

対象地域：インドネシア、日本、韓国

研究対象：ボロブドゥール、仏塔、階段状ピラミッド

1 はじめに

A 論及課題と方法

本論は、奈良市に残る特異な仏塔¹⁾である頭塔と、世界遺産であるインドネシアのボロブドゥール(Borobudur)遺跡の関係について、インドネシアでの研究を踏まえての検討を目的とする。

頭塔は類似遺構である大阪府堺市の大野寺土塔そして岡山県の熊山山頂石積遺構と共に、日本では極めて少ない階段状ピラミッド型の仏塔である。日本の仏塔研究の中でも例外的な特殊類型にされることが多く、アジア東部では僅かに韓半島南部に少し似た形状のものがあるだけで、早くからボロブドゥールとの類似が指摘されていた。だが多くのボロブドゥールとの比較研究は、ボロブドゥール自体のアジアの仏塔変遷における位置について言及されることが少なかったため、十分に説得力をもって理解されたわけではなかった。

ボロブドゥールの形状は、時代が遅れるミャンマーのバガン(Bagan)の仏塔群に似た形状のものがあるものの、インドやスリランカに完全な起源を求めることは難しい。つまりインドネシアで初めて誕生した形態と考えるのが自然だが、この点については日本ではほとんど議論されてこなかった。

本論ではインドネシアの巨石文化の系譜で生まれた石積基壇遺構との関係の中で、ボロブドゥールの位置を明らかにしたい。また頭塔との関係を考える上で大きな要素となる、南伝仏教と東アジアの関係にも言及したい。南伝仏教=上座部仏教というイメージが強過ぎるため、ボロブドゥールを中心とするジャワ仏教が華嚴経や密教と深い関係があったことがあまり理解されていないためである。

頭塔・大野寺土塔は発掘調査がなされており、また熊山石積遺構も修復調査が行われている。しかし同程度の考古学的情報は他の遺跡の場合と同様に、ボロブドゥールなどでもなされてはこなかった。あくまで建築史からの研究が中心で、発掘調査や出土遺物の研究は全く進んではない。そのため考古学的方法による詳細な年代比較などは限界があり、建築史や仏教史も含めた方法で検討を行っていくこととする。

B 先行研究

本論に關係する先行研究は、各分野にそれぞれ多数存在する。それらを仏塔全体の研究、頭塔などの研究、ボロブドゥールの研究に分けると、代表的なものは以下の通りである。

1) 仏塔の研究

日本における仏教建築史の草分けと言える伊東忠太は、19世紀末から仏塔に関する研究を行っている。法隆寺塔

から始まったその研究は、まもなく中国を経てインド・スリランカや東南アジアにも及んでいる(伊東 1900, 1914, 1936)。また韓半島の仏塔から研究を始めた建築史の関野貞は、中国からインドまで仏塔の系譜を探った(関野 1912-13, 1938)。中国の仏塔の起源を探る研究は建築史の大きなテーマであったが、特にガンダーラと中国の仏塔の関係については、村田次郎(村田 1940, 1989)や足立康(足立 1987)によってなされてきた。

一方、奈良や韓半島での仏塔跡発掘を早くから手がけていた石田茂作は、仏教考古学の提唱者であり考古学の視点での仏塔研究を最初に現した(石田 1931)。そして日本の仏塔全体の系譜をまとめる(石田 1969)と共に、仏教考古学の中での仏塔研究者の論考を編纂した(石田 1976)。この石田の仏塔研究は、1970年代から盛んになった日本国内の埋蔵文化財調査の中で、かなり影響を及ぼした。

アジアの仏塔の総合的な研究は、斉藤忠が長年行っている(斉藤 2002)。中でも仏塔の系統をまとめた展開はまとまっており、また本論に關係する頭塔などについては日本の特殊塔という分類にしている。そしてボロブドゥールとの関係についても言及している。

インドの仏塔については、建築史の視点で佐藤正彦が紹介を行っている(佐藤 1996)。

2) 頭塔などの研究

頭塔に関する研究は石仏レリーフに関する佐藤小吉(佐藤 1916)以来90年以上続き、早くも1922年には史跡に指定されている。また仏教建築史の面からも足立康(足立 1933)の研究以来、多くがなされてきた。考古学からの福山敏男の研究(福山 1932)は板橋倫行(板橋 1929)の研究と共に、頭塔が文献に記された神護慶雲元年の実忠による造塔であることを明らかにした。そして今日から見れば誤りが含まれるものの、石田茂作は早くから想定復元を行って、石仏レリーフの前面に歩道があるとの考えを提示した(石田 1958)。

奈良という古都の一面に現存する大きなモニュメントであり、しかも多くの石仏レリーフが露出しているため、各方面からの関心は大きかったと言える。東大寺研究者の堀池春峰は、文献上の築造年の3年前に起きた恵美押勝の乱との関係を指摘した(堀池 1964)。

インド文化の影響があることについては、西村貞(西村 1929)が菩提僊那などの関与を推測し、また石田茂作も同様の指摘を行った(石田 1958)。森蘊は頭塔をインド的要素が大きいとして、築造者の実忠についてインド人説を唱え(森 1971)、斉藤忠はボロブドゥールとの関連を明らかにした(斉藤 1972)。また吉田靖雄は、行基集団の中に南海仏教の接触者があったと想定し、また行基と菩提僊那の交流を考えて、斉藤説を補完した(吉田

1987)。

頭塔の本格的な実測調査は、森蘊によって1961年に初めて行われた(森・牛川1962)。そこで森は頭塔の南北主軸線が、東大寺大仏殿を意識して設定されたと考えた。そして1987年からの奈良国立文化財研究所による発掘調査(巽1989、奈文研2001)により、構造と年代に関する事実が具体的に明らかになった。特に途中で設計変更がなされたことが分かったことは大きな成果である。下層は基壇上に三層の石積で、熊山石積遺構に似ていることが判明した。また石仏レリーフの抜き取り痕も現れ、本来の配置の全体像が理解された。

この調査の報告の中で、岩永省三は頭塔などの源流に対する東南アジア説を否定し、中国磚塔からの影響を述べている(奈文研2001, 164-173頁)。

土塔については森浩一による出土人名瓦の研究(森1957)がきっかけとなり、以後半世紀の研究がなされてきた。多くの人名瓦は、古代史研究の資料として注目されてきた。また仏教考古学の立場から、福山敏男(福山1982)や石田茂作(石田1969)による研究がなされてきた。そして発掘調査は2000年から堺市埋蔵文化財センターによって開始され(堺市埋蔵文化財センター2006)、頂部以外を瓦で覆った十三層の構造であり、頂部は八角形であることが分かった。その成果をもとに復原整備作業が、現在継続されている。さらに行基研究の中からの関心も少なくなかった。

熊山石積遺構については、早くから「戒壇」という伝承があり、そのもとでの初めての調査報告が沼田頼輔(沼田1925)によってなされ、永山卯三郎(永山1930)が続いた。また福山敏男(福山1982)も関心を寄せていた。

そして戦前の盗掘資料についての梅原末治の研究(梅原1950, 53)が、年代と性格を考える本格的な研究となった。近江昌司は、盗掘出土の円筒形須恵器に関する詳細な検討を行い、そこから仏塔としての復元を試みている(近江1973)。その後、熊山町教育委員会による史跡整備がなされるようになった(熊山町教育委員会1974, 75)。

これらの3遺跡を共通するものとして理解しようとしたのは、福山敏男や石田茂作に始まる。しかし積極的に同じ性格のものとしての意味を早くから明らかにしようとしたのは、齊藤忠(齊藤1972, 2002)の研究である。単に3塔を高壇式特殊仏塔としてまとめただけでなく、祖形をボロブドゥールと考えて具体的な比較を行った。それまでもボロブドゥールとの関係をイメージした指摘は少なくなかったが、数値を上げての論及は初めてである。また頭塔を建立した東大寺の実忠の出自などにも、

議論を広げている。それらの内容については、後に詳しく見たい。

3) ボロブドゥールの研究

1814年当時ジャワ島を支配していたイギリスのラッフルズ(T. S. Raffles)が派遣したコルネリウス(H. C. Cornelius)の調査団により、ボロブドゥールの存在は広く世界に知られることになった。

しかしまもなくジャワ島の支配権を取り戻したオランダは、長く学術的な調査を行うことはなかった。ようやく1873年バタヴィア協会のレーマンズ(C. Leemans)は、最初の学術報告書を刊行した。そして1885年、イーゼルマン(J. W. IJzerman)は、現在の基壇の背後にある「隠れた基壇」の存在を発見した。

こうして19世紀末になってボロブドゥールに対する学術的関心は高まったが、同時に崩壊の危機の状態も明らかになってきた。そして1890年、蘭印政庁は宥和的植民地政策である「倫理政策」の一環として、ボロブドゥール保存対策の調査を開始した。その結果、コルネリウスの調査から1世紀近くたった1907年、ファン・エルプ(T. van Erp)は5年間を要することになる修復事業を開始した。この修復の主な対象となったのは、痛みひどかった上部の円形段部分の小塔群であった。ファン・エルプは修復事業で確認したボロブドゥールの状況を、1913年に設立された蘭印考古局の初代局長だったクロム(N. J. Krom)と共に1927年から公刊した(Krom & Erp 1927-31)。これはボロブドゥールに関する最も基本的な研究報告になっている。

その後1930年代には考古局長だったストットウルヘイム(W. F. Stutterheim)は、碑文研究からシャイレンドラ(Sailendra)王朝の輪郭を提示し(Stutterheim 1929)、その研究はデ・カスパリス(J. G. de Casparis)に引継がれた(Casparis 1950)。

1945年に独立したインドネシアでは、1953年にインドネシア人として初めて考古局長になったスクモノ(R. Soekmono)を中心にボロブドゥールに対する関心を継続した。調査研究の継続を図ると共に、ファン・エルプが修復の対象としなかった方形段部分の崩壊の危険を指摘し続けた。

スクモノらの長年の要請を受けて、ユネスコは1970年に国際的な修復の実施を決定した。そして1973年から10年間の修復事業を実施することになった。スクモノはインドネシア人研究者の立場でボロブドゥールの性格をまとめたが、そこでは在来巨石文化の中での山岳信仰遺跡との関係を初めて指摘した(Soekmono 1976)。

一方、ユネスコの修復で国際的な関心を呼んだボロブ

ドゥールに対して、新たな視点での研究が生まれてきている。その一つは、フランス極東学院のデュマルセ (J. Dumarcay) による、東南アジアにおけるインド系文化遺跡としての理解である。もともとシャイレンドラと関係するスリウィジャヤ (Sriwijaya) 王国の存在は 20 世紀初めにフランスの碑文研究者セデス (J. Cedes) が提唱したものであったが、デュマルセはその研究を継承しつつ遺跡としてのボロブドゥールのあり方についての建築史的研究を 70 年代後半以降行ってきた (Dumarcay 1977)。

またヒンドゥ・ジャワ文化遺跡の研究を継続しているミクシク (J. Miksic) はボロブドゥールについての研究史を総括した著作 (Miksic 1990) を現したが、そこでは聖山としての意味という新たな視点を提示した。これはスクモノが述べた在来巨石文化伝統との関係まで明記したものではないが、新たな研究の方向性を見据えたものと言える。

ボロブドゥールに関する日本人の研究は、20 世紀初頭の伊東忠太 (伊東 1936) そして 1920 年代の井尻進が先駆的に行っている。井尻は 1910 年代にジャワに移住して日本人商社に勤務していたが、ファン・エルプによる修復が終了したばかりのボロブドゥールに魅せられた在野の研究者である。大谷光瑞の知遇を得て刊行した著作 (井尻 1924) は、当時最も進んでいたクロムの研究も深く言及しており、専門の研究者ではないながら極めて興味深いものと言える。

インドネシア独立後の日本人研究者の関心としては、持田信夫と佐和隆研のものがある。井尻同様に在野の研究者で写真家でもあった持田は、ボロブドゥールの写真集を日本人として初めて刊行した (持田 1971)。佐和の著作 (佐和 1973) は仏教研究の視点でインドネシアの遺跡の全体像を紹介したもののだが、その中心にはボロブドゥールが置かれていたのは当然である。

しかし何と言っても、ユネスコの修復にも貢献した千原大五郎の建築史からの研究 (千原 1975, 83) が圧倒的にまとまっている。千原はジャワの古代寺院遺跡 (チャンディ candi) の全体の中でボロブドゥールを位置づけると共に、東南アジア全体のインド系建築遺跡を通しての理解も行った。

仏教美術特に図像研究の視点からボロブドゥールのレリーフについては、干潟龍祥のジャータカを中心としたものが早くなされている (干潟 1961)。日本に至るジャータカの伝来の中で、ボロブドゥールを中心とする南伝系統の存在を検討する先駆的な研究である。さらにジャワ仏教特に密教思想との関係の中でボロブドゥールを位置づけたものとしては、岩本祐 (岩本 1973) そして石井

和子 (石井 1992) の研究も大きな意味を持っている。

また筆者は巨石文化石積基壇遺構との関連の中で、ボロブドゥールを考えたことがある (坂井 1990)。さらに東南アジア仏教美術を専門とする伊東照司は、インド・スリランカと東南アジアの詳細な仏教図像比較研究を行う中で、ボロブドゥールのレリーフに関する著作を現し、そこには新たな指摘もいくつか見られる (伊東 1998 など)。

以上のように、ボロブドゥールに関する研究は 2 世紀に及ぶ研究の中で、さらに進展を見ようとしている。

2 頭塔と関連遺構のあり方

ここでは日本の 3 遺構について、その特徴をまとめてみたい。併せて熊山石積遺構とかなり似た韓半島の特殊な仏塔についても見てみよう。

A 頭塔の形態とレリーフ

頭塔は奈良市高畑町字頭塔にあり、東大寺南大門のほぼ真南 1.7km ほどの位置にあたる。東から延びてきた尾根から派生する小尾根上に築かれており、西側と南側は急斜面で平城宮方向の眺望は極めて良い。

東大寺南大門の中軸線から頭塔の位置は 100m ほど西にあたるが、この立地について発掘調査報告書は「平城京の街の中からは、構築物を最大限効果的に見せることのできる」ため「中軸線はずして、地形条件を重視して、視覚的効果の大きい位置に配置した」可能性を述べている (奈文研 2001, 104-106 頁)。

記録上は、「神護慶雲元年実忠和尚依僧正命御寺朱雀東作石塔」(『東大寺別当次第』) とあり、また「一 奉造立塔一基。在新薬師寺西野。以慶雲元年所造進也。」(『東大寺要録』第七東大寺権別当実忠二十九ヶ条事) とあるのが頭塔を指していることは、いずれの研究者も一致している。

発掘調査で、上下両層の頭塔があることが判明した。調査報告書によれば、それぞれの特徴は次のとおりである (奈文研前掲書)。

1) 下層頭塔

基壇上に築いた 2 層以上の構造である。各層の法量は次表のとおりである。

	東西辺 m	南北辺 m	高さ m
基壇	32.75~33.00	31.80~32.00	1.0~1.6
第 1 段	20.20~20.80	21.70~21.75	3.0
第 2 段	13.20~13.80	14.30	不明

第1段には仏龕が存在したことも判明した。調査では第3段は検出されなかったが、それは上層頭塔を作る際に破壊されたものと考え、また下層頭塔の造営開始は天平宝字4(760)年としている。

調査成果から本来3段の構造であったとし、各段の上面は瓦で葺かれていたと想定された。塔身の復原は、各段が均等の高さを持っていた場合(高10.35m)と、第2段以上が第1段の半分であった場合(高約8m)の2案が示されている。

この下層頭塔は設計が杜撰で土木工事として竣工が失敗したため、上層頭塔への改修が余儀なくされた。

2) 上層頭塔

下層基壇をかさ上げし、下層塔身を18%拡大して7段とした構造である。各段の法量は次表のとおりである(図1)。

	東西辺 m	南北辺 m	高さ m
基壇	32.75~33.00	31.80~32.00	1.35~2.30
第1段	24.20~24.85	24.80	1.35~1.50
第2段	22.10~22.45	22.50	0.55~0.80
第3段	18.50~18.70	18.80	0.80~0.95
第4段	15.80~16.00	16.00	0.45~0.75
第5段	12.30	12.40	0.85~1.05
第6段	9.70	9.80	0.85~1.00
第7段	6.35	6.35	0.75
総高			9.10

基壇端と第1段裾の間は、3.5m以上もあり非常に広い。これらの各段の中で、奇数段に仏龕がある。第1段に5カ所、第3段に3カ所、第5段に2カ所、第7段に1カ所で、各面11カ所合計44カ所になる。また第7段上面には基部の礎石を据えた心柱抜き取り痕(径0.46~0.65m深2.12m)が発見された。

瓦で屋根が葺かれていたが、それについては仏龕のある奇数層の上及び、頂部に存在した可能性のある木造塔身の上だけだった。全体としては五重の屋根で、偶数段は仏龕の前に位置するテラスになる。頂部の施設は心柱しか痕跡がないが、後述の土塔の例を参考にして瓦で葺かれた八角円堂として復原された(奈文研前掲書; PLAN6-1, 2)。

この上層の築造年代については明確な考古学的な証拠が確認されていないが、記録上の神護慶雲1(767)年は完成と考え、下層を破壊しての改造工事着手は「天平宝

字~天平神護年間に遡る可能性」を述べている(奈文研前掲書; pp. 109)。

頭塔が早くから注目されたのは、多数露出していた石仏レリーフの存在である。発掘調査で上記のような仏龕の配列が判明し、また地中に埋もれていた石仏の新たな発見もあった。それらの石仏レリーフについて、調査報告書は次のように比定している²⁾(奈文研前掲書, 76-82頁)

	位置	東面	南面	西面	北面
第1段	a	なし	破壊	善財童子知識 歴参図か	善財童子知識 歴参図
	b	維摩経 変相	未調査地	未調査地	抜き取り
	c	多宝仏 浄土	釈迦仏諸尊	阿弥陀仏浄土	弥勒仏諸尊
	d	破壊	未調査地	涅槃変相	下生弥勒仏
	e	破壊	善財童子知識 歴参図か	善財童子知識 歴参図か	抜き取り
第3段	a	法華経 変相	毘盧遮那仏	未調査地	抜き取り
	b	抜き取り	釈迦仏浄土	毘盧遮那仏	弥勒仏浄土
	c	破壊	未調査地	なし	シビ王本生
第5段	a	壺鷲山 浄土	過去七仏	未調査地	毘盧遮那仏
	b	二世並 坐像	未調査地	なし	三世仏
第7段		抜き取り	未調査地	毘盧遮那仏浄 土	毘盧遮那仏 浄土

下線は仏像の背後に建物が描かれているもの。

このような石仏の配置については後にまた検討するが、第1段に善財童子知識歴参図が多いこと、そして第3段から上位には毘盧遮那仏に関するものが目立つ点は注意を要する。

また北面第3段cはかなり摩耗しているが、拓本で天秤が確認できるためシビ王本生と認定された。類例が呉越王銭弘俶塔や京都報恩寺の白檀仏龕にあると注記されているが、銭弘俶塔は五代、報恩寺仏龕は北宋の中国製品である。そのためシビ王本生を描いたものとしては、このレリーフが古い。干潟龍祥によれば(干潟 1961)、もともと日本の工芸品にジャータカの説話を描いたもの

は少なく、法隆寺の玉虫厨子の投身餌虎図などしかない。8世紀には日本霊異記にも影響が見られることからジャータカがある程度広まっていたことは確かだが、このレリーフは数少ない物証と言える³⁾。

B 大野寺土塔

大野寺土塔は大阪府堺市土塔町にあり、すぐ北西側に大野寺そして南西側に大門池が接している。土塔も含めて全て、神亀4(727)年に行基が建立したとされる。

全体は截頭四角錐状をなし、次のような十三段の階段状を呈している(堺市埋蔵文化財センター2006による数値は復原値 図2)。

	形状と広さ m	高さ m
基壇	方形 53.1×53.1	1.18
第1段	同上 46.6×46.6	0.6
第2段	同上 41.3×41.3	0.6
第3段	同上 36.6×36.6	0.6
第4段	同上 32.5×32.5	0.6
第11段	同上 12.4×12.4	0.6
第12段	同上 10.4×10.4	0.6
第13段	八角形 6.1(径)	—
総高		8.6

基壇端と第1段裾の間は、やはり約3mとかなり広い。各段の低減率は一致しているわけではなく、調査者は「低いながら高く見せる効果を狙った」としている。基壇から比べると第12段の一边は1/5になっているが、それはこの方形最上段までの高さと同程度変わらない。

発掘調査では頂部で八角形に巡る粘土ブロックが出土しており、頂部の第13段には八角形の構造物が載っていたことが判明している。興味深いのは、内部は版築の盛土で築かれているが表面全てが瓦で覆われていたことである。各段の平坦部は建物の屋根のように瓦が葺かれ、垂直部分にも瓦が縦置きされていた。つまり土塔での瓦の役割は、盛土構造全体に対する雨水による崩落の防止を目的としたものだった。これは頭塔での石の使われ方と、全く同じ機能である。当然、築造にあたっては膨大な瓦の供給が不可欠であり、実際大野寺境内推定地で北西に200m離れた場所から2基の瓦窯跡が発見されている(内本 2002)。

すでに1952年頃の土取りで北東側1/4が破壊されたこともあって、完全に原形を保っているわけではないが、発掘調査成果から方形の各面は方位に完全に一致してい

た。大門池のある低地の走向は南東から北西であるが、その直上右岸の土塔の建立は自然地形を無視してなされたことになる。

「神亀四年」及び「神亀五年」銘の瓦が出土しているため、竣工までには少なくとも2年以上要したことも、調査で判明した。また注目すべきは、円筒状に積み重ねるような須恵器の破片が、いくつも出土していることである。これには直径37cmで願文を彫ったもの、そして鏝を持つ7段以上重ねるもの(推定径60cm、高44cm)などがある。

発掘調査報告書の遺構編がまだ刊行されていないため、新たな事実がさらに明らかになる可能性も残るが、現時点で土塔の特徴は次のようにまとめることができる。

- 1 内部空間を全く持たない截頭四角錐の構造物である。
- 2 版築による盛土を芯とし、瓦を外面保護部材として全体に用いて、基壇と12段の階段状ピラミッド形態を築いた。
- 3 最上段には円形構造物が載っていた。
- 4 築造は神亀4(727)年以降、少なくとも2年以上続いた。
- 5 隣接する大野寺の存在より、築造主導者は行基と考えられる。

1は最も重要な点であり、頭塔や熊山石積遺構と共通する特徴である。2の瓦を多用した多層形態も含めて中国の密檐式塔の影響がないとは言えないが、密檐式塔は基本的に内部空間を持つ垂直方向を意識した全く異なった形態である。3は覆鉢状構造物が想定でき、土塔が仏塔である可能性を大きく裏付ける。なお仏像が安置されていた可能性が低いことも、忘れてはならない。

また4も重要であって、現在の発掘調査成果からは竣工年を限定することはできない。5からは行基の役割が浮かび上がるが、行基自身は何の著作も残しておらず、どのような仏教思想のもとに土塔を築造したかははっきりしない。ただ明白なのは、このような形態の塔は日本ではそれまで存在していないことである。727年以前に何らかの形で行基が、土塔造営に関する国外からの情報を得ていたことは間違いない。

C 熊山石積遺構と円筒形陶器

岡山県赤磐市の熊山(海拔508.6m)の山頂近くに位置する。熊山は岡山県南部では最も高い山で、なだらかな山頂には熊野神社が鎮座している。

山頂から南側に200mほど離れた平坦面西端(海拔486.0m)の岩盤上に、割石で方形基壇を築いている。そ

してその上に3段の階段状方形ピラミッドが、割石小口積みで築造されている。各辺は概ね直角を意識しているが、主軸は磁北より約19度西に偏している。

第3段は西辺と南辺西側が崩壊しかけていたが、各段の法量は次表のとおりである（熊山町教育委員会 1975 図3）。

	東辺 m	南辺 m	西辺 m	北辺 m	高さ m
基壇	11.71	11.78	11.77	11.89	0.9/1.5
第1段	7.93	7.66	8.00	7.88	0.95
第2段	5.39	5.40	5.40	5.01	1.25
第3段	3.59	3.60	3.60	3.21	1.04
総高					4.14/4.74

基壇端と第1段裾の間は2m近くで、人が周りを巡るには十分な広さである。第2段の中央に方形龕（北辺幅75cm 高88cm 奥行91cm 西辺は崩落により現存せず）があり、第1段上面を底にしている。南辺の龕がやや大きい。いずれも内部には何も残っていない。第3段上面の頂部には、蓋石を持つ方形の石室状堅穴（一辺0.75～0.80cm、深さ2.0m）があった（熊山町教育委員会 1975）。この堅穴は1937年に盗掘され、内部から円筒形須恵器（現在の積み上げ高161cm、基底部径46cm）と奈良三彩小壺が出土している（梅原 1950, 1953）。

基壇幅の1/3が第3段の幅になっており、基壇上の高さはそれに近い。第2段が他の段に比べ高いが、それは龕の存在に起因したためだろう。それだけに龕は、外見的にこの遺構の大きな要素になっている。

奈良三彩小壺は所在不明となったが、円筒形須恵器はその後天理参考館で保管されている。この円筒形須恵器の観察に基礎をおいて、近江昌司は石積遺構の性格を視野に入れた詳細な検討を行っている（近江 1973）。極めて重要な指摘も含んでいるので、その論旨を次に紹介したい。

- 1 石積遺構は土塔や頭塔と同じような仏塔であるが、形態からは行基墓や天武持統合葬陵のような塔型の墳墓の可能性もある。
- 2 いずれの場合も石を構築材料に選択したのは、この場所で得やすいことが理由である。
- 3 現在5個の部分に分かれる円筒形須恵器は基底部分と第1円管が丁寧に組み合わせられるのに対し、それより上位の接合部分は極めて不安定である。そのため本来3個の宝輪を組み込んだ相輪の一部だった可能性が推定できる。8世紀中葉に邑

久古窯跡群で生産されたと考えられる。

- 4 奈良三彩小壺は舍利容器の可能性はあるが、共伴したとされる海獣葡萄鏡は宋代の踏み返し鏡である。
- 5 古代末以降、熊山では備前焼陶工や刀鍛冶集団を信者とする修験道の靈仙寺が栄えていた。
- 6 この時代に破損していた宝輪が除かれて、秘仏的な意味で円筒形須恵器は堅穴内に埋置された可能性があり、海獣葡萄鏡はそれを裏付けている。
- 7 周辺に散見する他の石積小遺構は、中心の石積遺構を模して中世に造営された墓ではないか。

円筒形須恵器を詳細な観察に基づいて、3個の宝輪部分が欠損した相輪とみなす考えには説得力がある。少なくとも何らかの別の部分が失われている可能性は高く、現在の5個部分のみが本来の姿ではなかったことは確かだろう。蓋部については四方の火炎状突起を水煙とみなしている。筆者はかつて特に蓋部の形状から見て、ヒンドゥ教シヴァ神の象徴であるリング lingga（男根像）ではないかと考えた（坂井 1990, 46 頁）。しかしこの近江の欠損部分の指摘を受入れると、相輪説も妥当と見なすことができる。

古代末の修験道化による堅穴への埋置も、宋代の踏み返しとされる海獣葡萄鏡の所在が不明であることが気になるが、基本的にありうることと考える。

ただ本来塔型の墳墓で三彩小壺（推定高約10cm）を舍利容器とみなすには、堅穴の大きさが深過ぎる感じがある。頭塔では頂部に同程度の規模の心柱抜き取り孔が発見されており、似た機能であったと考える方が自然と思われる⁴⁾。

以上のように近江の指摘は多くが納得しやすいものである。円筒形須恵器が相輪であるとの考えは、土塔や頭塔との類似性をさらに補強しているとも言える。ただ現存しない行基墓や詳細な状況が不明の天武持統合葬陵よりこの遺構が塔型墳墓であるとするのは、飛躍があると言わねばならない⁵⁾。

この石積遺構が、土塔や頭塔と共通する思想で築造されたと考えるのは自然である。石材を用いたのは近江も言うように、立地条件に規制されたためだろう。ではなぜ熊山山頂近くが選ばれたのか。残念ながら現在それに回答する材料は持たないが、何らかの土塔・頭塔に共通する要素があったはずである⁶⁾。

D 韓国南部の石積遺構

韓国南部には、熊山石積遺構に類似したものが4基確認されている。斉藤忠によれば、それらの状況は次のと

おりである（斉藤 2002, 175-179 頁）。

1) 慶尚北道義城郡安平面石塔洞石塔

板石の小口積みで、次のような方形 5 段の階段状ピラミッド構造を築いている。ただし斜面に立地するため、東辺は 7 段、南北辺は 6 段で基壇を形成している。

	平面 m	高 m
第 1 段	11.6×11.1	0.90
第 2 段	8.4×9.5	0.85
第 3 段	5.4×6.7	0.75
第 4 段	3.5×5.1	0.50
第 5 段	1.7×3.6	0.40
総高		3.40

第 2 段各辺中央に、龕（高 85-86cm 幅 50-70cm 奥行 87-110cm）がある。崩れた北辺以外（斉藤の踏査に同行した朴日薫は東辺とする）は龕が良く残り、内部には光背を持ち蓮華座上に半肉彫りの仏像（高 65-67cm）がある。斉藤は仏像について東辺を薬師如来、西辺を阿弥陀如来としている。

写真（斉藤 2002:図版 87）を見ると、龕の中間に 1 段あるようであり、その場合は全体で 6 段となる。龕の底面は地形に沿って水平面を形成したような石積みで、これを基壇とすればその上に 5 段が積まれていた。

2) 慶尚北道安東郡北後面石塔洞石塔

これも板石の小口積みで、次のような 5 段を築いている。

	平面 m	高 m
第 1 段	13.0×13.2	1.30
第 2 段	10.8×10.9	1.20
第 3 段	7.7×8.2	1.00
第 4 段	5.5×5.9	0.80
第 5 段	2.1×2.6	1.00
総高		5.30

第 4 段と第 5 段は長方形平面で、全体に龕は見られない。また最上段は長方形ぎみになっている。

3) 慶尚南道山清郡今西面伝仇衡王陵

自然石を 7 段積んだものだが（第 1 段辺長 20.6m、総高 11.15m）、頂部は楕円形をなしている。第 4 段中央に龕（42×47×65cm）がある。

4) 慶州市普門洞陵旨塔

市街地南東の狼山は 7 世紀以降の王陵と仏寺が集中し

ているが、この塔は北嶺と南嶺の間の中腹に位置する。花崗岩切石（1.21×0.3m）を 3 列積み、2 段の土壇側面を覆った構造（下辺長約 5.76m）である。石の間には小礫と粘土が充填されている。相輪片と推定される石材が出土している。この遺構の近くには、十二支像板石と蓮弁文板石で囲われた略円形土壇（平面 22.7×21.21m 高 4.55m）がある。

以上は 1937 年にこの遺構を調査した斉藤自身の報告（斉藤 1938）によっているが、この時点で斉藤は火葬場として捉えた。後に陶製十二支像及び炭化木石片・瓦磚・仏像片が出土した発掘を行った申營勳は、文武王の火葬場とした（申 1975）。2002 年に斉藤は、この遺構を火葬場と関係のある「一種の仏塔」と考えた。狼山は慶州の京城の南東を画するともされる（東・田中 1988, 262-263 頁）重要な位置にある。さらに北嶺東麓には、706 年に建立された伝皇福寺三層石塔が存在する。皇福寺は、新羅に華嚴宗を伝えた義湘が剃髪した寺として知られている。なお東潮と田中俊明は、陶製十二支像の出土より陵旨塔の年代を 8 世紀前半と考えた（東・田中前掲, 138 頁）。また性格不明だが、現在の復元には問題があるとしている。

これらの 4 例は、韓半島に見られる仏塔の中では極めて例外的な存在である。韓半島に残存する仏塔の多くは石塔であるが、その形状は基本的に中国の樓閣式及び密檐式仏塔を意識した垂直方向に延びる構造である。階段状ピラミッドに似たこの形態のものは他になく、その分布範囲は最も離れた慶州と山清間でも 130km ほどである。特に義城と安東の両者の距離は、30km 程度でしかない。

斉藤は、義城と安東の例について積石構造から本来 5 段もしくは 3 段が想定されると考え、時期としては秦弘變が義城塔の石仏の様式から統一新羅末期頃としている（秦 1971）。前述のように陵旨塔は陶製十二支像が出土したことにより、統一新羅時代の 8 世紀前半の年代が考えられている。だが義城塔の年代根拠の石仏が後世の補填である可能性もあり、陵旨塔との関係は明らかでない。

問題は、これらがどのような関係にあるかである。安東塔は未完成とするなら、地理的にも近い義城塔との差は大きくない。だが陵旨塔とこれら 2 者は、形態的に大きな差がある。少なくとも現在の資料では、同一系譜での変化とするには躊躇がある。

ただし十二支像を持つものでは、陵旨塔と九政洞方形墳のみが方形であり、円形の王陵に比べ方位の意識がより顕著である。これは頭塔の仏像配置と似ているとも言える。さらに明らかなことは、義城塔と熊山石積遺構の

形態が極めて類似している点である。石積みの初段に龕を設けている状態は、基本的に同じである。また階段状ピラミッドの側面に仏像を配置しているというあり方は、頭塔とも共通している。

これらのあり方をまとめると、韓半島の方形石積階段状遺構は仏教思想を基盤としており、方位観を提示したモニュメントとも言える。また比較的近い築造時期が考えられており、日本の熊山石積遺構や頭塔との類似性があることは確かである。そこに何らかの繋がりがあった可能性は決して小さくないと言える。

E 小結

齊藤忠は、日本の3塔の共通性を次のようにまとめている（齊藤前掲書、239-241頁）

- 1 仏教寺院と何らかの関係がある。
- 2 方形プランで壇を持つ多段形式である。
- 3 基底の広がりには高さより低い。
- 4 かなり広い幅を持って基壇上に築造されている。

以上に加えて齊藤も十分認識していることだが、最頂部の構造を除いて基本的に内部に空間を持たない共通点がある。

3は次のように整理できる。

	初段幅 A	頂部幅 B	高さ C	B/A	C/A
上層頭塔	24.8	6.35	6.8	0.26	0.27
土塔	46.6	10.4	7.4	0.22	0.16
熊山石積遺構	7.9	3.6	3.2	0.46	0.40
義城安平塔	11.6	3.6	3.4	0.31	0.29
安東北後塔	13.2	2.6	5.3	0.20	0.40
石村洞4号墳	24.0	13.2	2.3	0.55	0.10
將軍塚	29.3	—	11.3	—	0.39
九政洞方形墳	9.5	—	3	—	0.32

初段と頂部の一辺の幅を見ると、熊山石積遺構が1/2近くと最も近いが、これは3段しかないためだろう。高さとの関係は、やはり熊山が最も高さの割合が大きい。韓半島の2塔も熊山と同程度以下である。積石塚古墳との関係では、上下の長さの比は全体に古墳の方が大きく、高さとの比も石村洞4号墳を除いて古墳の方が大きい傾向にある。

つまり側面形態は古墳と同程度かそれよりも高さの割合が小さく、「塔」という言葉のイメージする垂直方向への指向性が小さいことは確かである。

頭塔を調査した岩永省三は、頭塔と土塔の発想源は素

材の積み上げ工法・軒の出がない形状・各層のセットバックから中国の「磚塔」ではないかとしている（岩永2002:pp. 32）。この根拠からみれば、熊山石積遺構も当然そこに含まれる。

この場合「磚塔」とは、密檐式塔を指しているものと考えられる。しかし、開放的な内部空間の有無そして上記のような水平指向を見るならば、これらの塔の形態は「磚塔」よりもむしろ積石塚古墳に近いことは明瞭である。もちろん古墳から生まれたわけではなく、安定的な土木造形を築こうとした時の自然な類似であろう。

3 塔型建築物の伝播

ここで改めて、仏塔の誕生と伝播過程を見てみよう。

仏塔とは仏教における礼拝対象で、本来は紀元前3世紀にマウリア朝のアショーカ王が仏陀の遺骨を分骨埋納した構造物に始まるとされる。しかし紀元後2世紀にガンダーラ地方などで仏像が誕生するや、礼拝の対象としての仏塔の意味は次第に変化し、仏教寺院の象徴としての役割になっていった。さらに各地の伝統に適合した形態にそれぞれ変わっていくが、ストゥーパの言葉の持つ象徴的意味は大きく残り続けたとも言える。

ここでは、仏塔の誕生から頭塔やポロブドゥールの時代までの、伝播と変化を概観してみたい。

A インド・スリランカの仏塔

仏塔の誕生と言われるアショーカ王が建立した塔は、全く残っていない。インドの仏塔で現在残る最古の例は、マディヤ・プラデーシュ州のサーンチー(Sanchi)の仏塔群である。

佐藤正彦によれば（佐藤1996、125-166頁）、前3世紀にアショーカ王が建立し、その後前2世紀に修復されて現在の姿になったとされる第1塔（図4）は、レンガで巨大な半球形構造物（覆鉢）を築き、その頂部を水平に切って方形の柵（平頭）を設け内部に三重の傘蓋を立てている（直径36.6m、総高16.5m）。半球構造物の下位にはテラスを設け、またテラスと地上には欄楯が巡っている。これらの欄楯に沿って信者は、礼拝を行った。また地上の欄楯の四方には、前1世紀にジャータカなどのレリーフが施された特異な楼門（トラナ）が設置されている。第3塔は傘蓋が一重であり、高さが低いが、基本的には第1塔と同型式である。

同様の半球形構造物の上に柵と傘蓋を付けた形状の塔は、マハーラーシュトラ州のアジャンター(Ajanta)石窟第10窟に見られる（佐藤19**）。サータヴァーハナ朝が築いた同石窟は礼拝対象であるチャイティヤ窟と僧坊の

ヴィハーラ窟に分かれるが、紀元後 2 世紀始めの第 10 窟は最古のチャイティヤ窟であり、まさにこのような仏塔自体が礼拝の中心であったことが分かる。同様の仏塔は同時期のバージャ(Bhaja)石窟第 12 窟やカールラー(Karla)石窟第 8 窟でも見られる。5 世紀のチャイティヤ窟であるアジャンター第 19 窟や第 26 窟には塔の前面に石仏が安置されており、仏像の成立によって礼拝の対象は塔から仏像に移って行った状況が判明する。同じ状況を示すチャールキヤ(Chalukya)朝時代のエローラ(Ellora)石窟第 10 窟では、三尊仏の背後にある塔の覆鉢は半球形からつぶれた球形に変化し、下半部は高い円筒形になっている(総高 8m)。

仏陀の活動地域であるウツタル・プラデーシュ州のサルナート(Sarnath)(鹿野苑)やビハール州ボードガヤー(Bodhi Gaya)には、異なった形状の塔が残っている。

前者のダーメク(Dhamekh)塔(径 36m 残存高 43m)は大小の円筒形が上下 2 段に接合された形をしている。下段は全体にロータス状の浮き彫りの中に仏龕が設置されており、それは仏像成立後の状況を示している。また上下両段共に頂部は球形をなしているので、本来は大小二つの半球形が接合した形状が推定される。グプタ朝後期の 6 世紀頃の創建と考えられている。

ボードガヤーのマハーボディ(Mahabodhi)寺大塔(高 52m)は、現状では方形の祀堂の上に巨大な四角錐型の塔が立ち、その四方に同形に小塔が並ぶ形状である。金剛宝座型と呼ばれるこの姿は、19 世紀後半にイギリスが大改修したものが基礎になっており、似た形状のものが時期的にどこまで遡れるかは明瞭ではない⁹⁾。基本的にこの四角錐の形状は、北方式ヒンドゥ教寺院の祀堂の頂部であるシカラ(sikhara)からの影響と考えられる。

一方、パキスタンからアフガニスタンにかけて、紀元後 2 世紀から 5 世紀頃の仏塔が残っている。比較的残存状態の良いアフガニスタンのグルダラ(Guldara)の塔を見ると、方形の祀堂状基壇の上に円筒形構造が載り、その頂部は半球形をなしている。この円筒形部分には列状に龕が並んでいる。この地域で最大の塔と推定されるパキスタン、ガンダーラ地方(ペシャワール Peshawar)のクシャーナ朝カニシカ王大塔は、現在シャー・ジ・キ・デリー(Shah-ji-ki-Dheri)遺跡に基壇跡しか残っていない。齊藤忠によれば、この基壇跡は方形で一辺 70~80m を測るが、玄奘の『大唐西域記』には「雀離浮図」と記述され、5 層の基壇があり 25 層の金銅層輪があったと記される(齊藤 2002, 66-69 頁)。グルダラ塔と似た形状が考えられるが、すでに玄奘の時代に 3 回の修復を経ているとのことなので、2 世紀のカニシカ王の時代の形状と

は異なっていた可能性もある。より古い前 1 世紀から後 2 世紀と考えられているタキシラのダルマラージカー(Dharmarajika)寺院の仏塔跡は、単純な半球形形状を示している。

南インドでは、アーンドラ・プラデーシュ州にあるサータヴァーハナ(Satavahana)朝のアマラーヴァティ(Amaravati)寺院跡の塔が知られている。残念ながら 19 世紀の調査で破壊されてしまったため、紀元後 1~3 世紀の仏塔は現在円形の基部(径 51m)を残すのみである。しかしこの遺跡で発見されたレリーフ(写真 1)には詳細な仏塔の状況が見られ、それは基本的にアジャンター第 10 窟の塔に近い。ただし半球部に接して 4 カ所に 5 本の石柱列があること、半球部本体下側にレリーフがあること、そして傘蓋部が確認できないことが異なっている。

このように北西方向への仏塔の流れは方形基壇が発達するのに対し、南方向への流れは半球形形状がかなり強く保持される。そのあり方は、スリランカの状況で顕著に見ることができる。

スリランカでは、初期の都アヌラダプーラ(Anuradhapura)に巨大な仏塔がいくつも残っている。

前 3 世紀創建とするトゥーパーラマ(Thuparama)塔(径 17.7m 高 19m 写真 2)、ルヴァンヴァリサーヤ(Ruvanvalisaya)塔(基壇辺長 142m 現高 55m)、1 世紀創建とされるアバヤギリ(Abhayagiri)大塔(径 106m 現高 74m 写真 3)、ジェーターヴァナ(Jetavana)塔(現高 70m)、ダクヌ(Dakunu)塔(基壇辺長 113m)などである。

それぞれ後代に修復が繰り返されているが、最古とされるトゥーパーラマも 7 世紀に修復され、形状は両側面がほぼ垂直で半球形というより隅丸方形に近い。ルヴァンヴァリリサーヤの前面には、アマラーヴァティ様式の仏像が置かれている。

また 11~13 世紀の都ポロンナールワ(Polonaruwa)にも、12 世紀後半のキリ Kiri 塔(径 21m 高約 30m)が残っている。

これらの塔の形態的特徴としては、頂部の傘蓋部が細長い円錐形に、また柵が低い直方体(平頭)に変化し、それぞれが半球形部(覆鉢)に対し大きくなったことが上げられる。低い方形の基壇に載るものが多いが、そのような形態変化のため全体に高さが強調されることになった。

B 東南アジアへの仏教伝播と仏塔

東南アジアへのインド系文化は早くから各地に伝来しているが、ボロブドゥールより古い 8 世紀以前の仏塔に限って見るとほとんどミャンマーとマレー半島に限られ

る。

ミャンマーでは、エーヤワーディ川流域にピュー(Pyu)族の都市国家が最初に形成された。それらの中で仏塔の痕跡があるものは、アウン・タウ(Aung Thaw)によれば次のとおりである (Aung 1972)

1-5 世紀の存続が推定されるベイトノー(Beikthano)では、発掘調査で2段の方形基壇上に築かれた円形プラン構造物が発見されている。これはアマラーヴァティ様式の仏塔と考えられているが、上部の形状ははっきりしない。

ピュー最大の都市であるシュリクシェトラ(Sriksheetra) (チャイキッタヤーThayekhittaya) には、パヤーギー(Payagyi)塔、パヤマー(Payama)塔、そしてボーボーギー(Bawbawgyi)塔 (高46.6m 写真4) が残っている。パヤーギーとパヤマーは3段の低い円形基壇の上に築かれた円錐形をなしているが、直径より高さが大きく砲弾型に近い。それに対してボーボーギーは同様の低い5段の基壇の上に高い円筒状部分 (直径約20m 高約30m) が載り、頂部のみが低い円錐形をなしている。前2者もすでにアマラーヴァティ様式からの変化とも考えられるが、ボーボーギーはむしろサルナートのダーメク塔からの影響と考えるのが妥当である。

シュリクシェトラでは5世紀と考えられる南インド系文字の碑文が出土しており、唐代の記録が残る9世紀まで存続していた。南インドとの交流はあったものの、北インドからの影響も否定できない。

キンバ(Khinba)マウンドから出土した銀製のミニチュア塔 (図5) は、上半が七重の傘蓋を持つエローラ第10窟に近い類球形をなし、下半は似た類球形の基壇を持っている (Aung 1972, 16頁)。恐らく初期の頃は、このようなエローラやアマラーヴァティ様式に似たものが伝わったことは間違いない。また覆鉢が半球形でほとんどアマラーヴァティ様式塔そのものを刻んだ、石製奉献板 (写真5) が出土している。その逆台形の平頭からは、アジャンター第10窟やカールラー第8窟からの影響をより近く感じさせる。ただし基壇には仏坐像が彫られた5基の龕が並んでいる。

このように南北両様式が混じる形で形成されたピュー様式の塔は、やがて両者が融合して円筒形下部の上に半球形の上部が接合するようになる。

エーヤワーディ川中流のバガン(Bagan)は11世紀中葉にビルマ族に初めて建設されたバガン朝の王都であり、数多くのビルマ様式仏塔 (パゴダ pagoda) で知られている。しかしここにはバガン朝成立以前のピュー様式の仏塔も少し残っている。ブパヤ(Bupaya)塔 (写真6)、ガッ

チウエラダウン(Ngakyweradaung)塔が、それである。またバガン朝初期の1059年に築造されたローカナンダ(Lawkananda)塔も、同様のピュー様式と言える。しかしボーボーギーと大きく異なって、多角形の5段程度の高い基壇の上に建てられている。

そのようなバガンのピュー様式仏塔から基壇がさらに発展して高くなり、また頂部の円錐形部分が大きくなったのが、初期ビルマ様式のシュエジーゴン(Shwezigon)塔 (11世紀後半建立)、シュエサンドー(Shwesandaw)塔 (1057年建立 写真7) であり、その系譜は末期のミンガラゼーディ(Mingalazedi)塔 (1284年建立) にも引継がれている⁹⁾。

特にシュエサンドーは形態的にボロボドゥールとの類似が指摘されているが、その形状の起源は末期ピュー様式仏塔から基壇が階段状に高く変化することでできたと言える。ボーボーギー様式に高い基壇が付設されるこの変化について、何らかの形でボロボドゥールからの影響があった可能性は年代的に考えられる。しかし逆にボロボドゥールの形状が、ピュー様式からの流れで成立したと見ることはできない。

またシュエジーゴンなど初期ビルマ様式のものには、基壇にテラコッタや緑釉陶板製のジャータカ・パネルが嵌められていることも注意を要する。

タイ中部のナコン・パトム(Nakhon Pathom)には、ドヴァーラヴァティー(Dvaravati)時代 (7-11世紀) の仏塔プラパトム・チェディ(Phra Pathom Cedi) (写真8) が残っている。後世の補修で正面に仏陀立像が納められた部屋が設けられたものの、形態的には明らかなアスラダプーラ時代のスリランカ様式を示している¹⁰⁾。

15世紀以降イスラーム化したマレー半島では、現在8世紀以前の歴史を持つ仏塔は全く残っていない。しかしいくつかの考古資料は、早い段階で仏教が伝わっており、仏塔に関する知識ももたらされていたことを示している。

まずクダー州南部で発見された、ブッダグプタ(Buddhagupta)碑文 (図6) がある。この碑文の中央には蓮華座の上に球が描かれ、その上には直方体、そして高い七重の傘蓋が載っている。蓮華座から下は細い蓮の茎部分が描かれており、観念的に蓮と仏塔を合体させた図像である。全体の形状は蓮華座こそ異なるが、バージャ第12窟の塔に似ている。この塔画像の両側に南インドのパッラヴァ(Pallava)文字によるサンスクリット語の碑文があり、航海者ブッダグプタの名が記されている。5世紀中葉頃と推定されている。

その近傍では、同じように仏塔の画像を刻んだスンガイ・マス(Sungai Mas)碑文 (41×25×5cm 図7) も発見

されている。これは5段以上の高い方形基壇の上に蓮華座があり、そこに半球形が載り、さらに板状と逆台形部分が描かれている。上部が破損しているが、逆台形の上には傘蓋があった可能性が高い。蓮華座から上は、アジャンター第10窟やカールラー第8窟の塔にかなり近い。ただ問題は高い基壇部分で、半球形頂部までの高さの3分の2近くになっている。形状に違いがあるものの、この割合はむしろエローラ第10窟の塔に近い。なお蓮華座のすぐ下側には、柱状のレリーフがなされている。ブダグプタ碑文と異なって、実際の塔であっても不自然ではない図像である。周縁にはパッラヴァ文字によるサンスクリット語で経文が刻まれており、5-7世紀と考えられている (Miksic 1998, 岩本 1996, 8-9頁)。

両碑文が発見されたクダー州南部のブジャン(Bujiang)溪谷地域は、ヒンドゥ教も含める多数の寺院跡が集中して発見されている。グプタ様式の青銅製仏像が発見されており、この地域の寺院の中には、9個所の仏教寺院が確認されている。その中にはSB1遺跡のように八角形の建物跡(径19.5m)もあり、これを仏塔跡とする見解もある (Jacq-Hergoualc'h 1992, 49-50頁)。

一方、ブジャンから150kmしか離れていない南タイのヤランYarangでは、8-9世紀のレンガ積の寺院跡群が発見され、そこから大量の陶製ミニチュア塔(瓦塔)が出土した。それは柱状構造がレリーフされた高い基壇の上に、蓮華座と少しつぶれた球形構造が載る形である。球形構造の形が少し異なるが、基本的にはスンガイ・マス碑文に描かれた塔とほとんど同形と見ることができる (横倉 1995)。これらが出土した遺構は正方形(一辺約13m)の四面に階段が付く構造で、これを塔と見る考えもある。

8世紀段階に、球形構造と高い基壇がセットになった仏塔がマレー半島地域に存在していた¹¹⁾。この地域の北側のナコン・シタマラー(Nakhon Si Thammarat)では775年の紀年銘を持つスリウィジャヤ(Sriwijaya)の碑文が発見されており、ボロブドゥールを考える上でも重要な意味がある。

なお早くからインド文化の影響がもたらされたメコン川水系では、扶南(Funan)などの国家が後2世紀には誕生している。そして後のアンコール朝に続く石造建造物文化が確立するが、その中心をなしたのはヒンドゥ教であった。仏教は7世紀にはカンボジア南部のタケオ(Takaev)地方に伝わったことは確かだが、仏塔はまだ発見されていない。

以上をまとめると、東南アジアでは全体に5世紀頃には主にアジャンター・エローラ・アマラーヴァティ様式

の仏塔が南インドから伝わった。またやや遅れてアヌラダプーラ様式の仏塔の構造もスリランカからもたらされた。一方北インドの仏塔からの影響もあったが、それはミャンマーに限られた。

東南アジアでは南インド様式は高い基壇が発達して行く傾向にあり、スリランカ様式も高く巨大化させることに大きな関心がなされたと考えられる。ただしいずれも直接ボロブドゥールの祖形になったとは見なせない。

C 中国の仏塔

中国の仏塔は種類が多いが、本論で対象とする8世紀までに築かれた現存するものは密檐式・楼阁式及び亭閣式に限られる。

密檐式の代表例は、河南登封嵩嶽寺塔(520/524年、高40m 写真9)や陝西西安薦福寺小雁塔(707年、現高43.3m)があり、共に十五層だが前者は平面十二角形、後者は四角形である。さらに河北房山雲居寺北塔小塔(711/727年)は、四角六層である。また楼阁式では、西安の慈恩寺大雁塔(652年、第1層辺25m高63m 写真10)と興教寺玄奘墓塔(669年、高20m)が著名で、共に四角形で前者は七層、後者は五層をなしている。亭閣式は山東歷城神通寺四門塔(611年、高13m)が代表である。

圧倒的に多い密檐式と楼阁式は共に多層塔であって、いずれも基部が垂直方向に長大化している。前者は基壇の軒が重なって延びた構造であり、後者は基壇が階層をなした状態である。それに対し亭閣式は基部が単層のものを指す。

これらはインドで仏塔の主要な部分であった半球形構造及びその上位の平頭や傘蓋が形骸化し、反対に基壇が異常に拡大発展した構造と言える。いずれの型式でも基壇は空間をなして内部に入ることが可能であり、時には仏像が安置される。半球形構造より上は単なる屋根飾りに過ぎなくなっている。

このような中国仏塔の形成過程については、伊東忠太や関野貞以来、さまざまな検討考察が考えられてきたが、ガンダーラでの基壇が祀堂化した形状を出発とすることはほぼ共通している。また垂直方向に高くなったことは、道教の神仙思想の木造建築との融合が理由であると考えられることが多い。

その他に絵画資料などでは、齊藤忠の紹介(齊藤 2002, 128-145頁)に従えば8世紀までの仏塔には次のようなものがある。

1) 敦煌第428窟金剛宝座式塔(北周)

中央に大塔があり、その四方に小塔が配せられている状態は確かにボードガヤーのマハーボディ寺大塔と同じ

組み合わせである。しかし大塔・小塔の全ては樓閣式の三層塔であり、単独の仏塔としての形状は樓閣式と言える。

2) 竜門石窟奉先寺天王像円形三層塔 (8世紀初頭)

頂部には蓮華座の上に円錐形構造物があり、その下に円形の三層がある。齊藤が述べるようなサーンチー塔の模倣というより、基本的に日本の百万塔の形状に近い。ただし塔身も各層と共に円錐状に広がっており層間も接近しているので、密檐式を表現しているのかも知れない。

3) 雲岡石窟石仏寺窟三層塔

大きな基壇の上に載った三層の樓閣式塔で、頂部には比較的大きな半球形構造が見られる。三層の屋根の下には組物構造があり、木塔がモデルだった可能性がある。

4) 雲岡石窟第2窟七層塔

やはり樓閣式で、各層の屋根先からは垂飾そして層輪からは2枚の幡が垂れ下がっている。

5) トルファン、ベゼクリク(Bezeklik)石窟壁画

蓮華座の上に蜜柑型の球形構造が載り、その上に隅飾りを付けた二重の平頭がある。さらに頂部は円錐形をなし、剥落した先端から4枚の幡が下がっている。

6) クチャ、クムトゥラ(Kumtura)石窟壁画

上半は半球形構造の上に皿形部分があり、その上に2枚の幡を垂らした円錐形頂部が載る。下半は仏像が入った祀堂状基壇で、半球形構造との間は皿形であったり、獣脚状だったりしている。実際の建造物そのままとは考えられないが、ガンダーラ様式の仏塔との関係が考えられる。

ベゼクリクやクムトゥラに似た大きな半球形構造がある仏塔は、アフガニスタンのパーミヤン壁画にあり(齊藤 2002, 257 頁挿図 83)、また敦煌壁画にも見られる。しかし敦煌で興味深いのはそれが重なったり、下位に多層の樓閣が加わるものが多くあると言う(齊藤前掲書 141 頁挿図 37)。

以上のような状態から、ガンダーラから西域ルートで仏塔が伝わる中で、基壇部分が樓閣状になっていく過程を見ることができる。しかし密檐式については、齊藤は竜門石窟の中に七層のものがあると述べている。布野修司は密檐式の成立について、北方型ヒンドゥ教寺院の高塔(シカラ)からの影響を述べている(布野 2006, 83 頁)が、その伝播経路が樓閣式と同じなのかに興味を持たれる。

そのような8世紀までの中国の仏塔を見た時、その型式に関わらず、先に記したように基本は基壇が垂直方向に発達したものだ。そして基壇が水平方向に強調されたものは存在していないと言える。

4 ボロブドゥールの位置

インドネシアのジャワ島中部クドゥ(Kedu)盆地にあるボロブドゥールは、これまで見て来た仏塔の発展史の中ではかなり特異な位置を占めている。後述のようにその築造は8世紀後半に始まるが、それ以前に似た形状の仏塔はどこにも見られない。類似性が感じられるアンコールのバコン(Bakon)やプノム・バケン(Phnom Bakheng)は9世紀後半であり、バガンのシュエサンドーなどは11世紀中葉の建立である。

それではインドネシアのインド系建築特に仏教建築の流れの中で、ボロブドゥールの位置を確認してみたい。また重要な要素であるレリーフの特徴、そして建立年代について現在の研究成果を見てみよう。

A ジャワの仏教寺院前史

インドネシアでのインド系文化の伝来は、4世紀にカリマンタン島東部のクタイ(Kutai)で発見されたムーラワルマン(Mulawarman)王関係の碑文群を嚆矢とする。続いて5世紀には西部ジャワで、タールマヌガラ(Tarumanegara)のプーラナルマン(Purnawarman)王関係の碑文群が発見されている。いずれもサンスクリット語を南インドのパッラヴァ文字で記したもので、ヒンドゥ教に基づく王権の確立を現している。

仏教関係ではスラウェシ島西部のシケンデン(Sikendeng)で発見されたアマラーヴァティ様式の青銅製仏像が最古である。だが3-5世紀のインド産とされるこの青銅仏の発見地では、他の遺構の存在は明らかでない。

確実な仏教遺跡は、7世紀後半にスマトラ南部のパレンバン(Palembang)地方で集中して発見されている。683年から686年間の紀年銘を持つ、カドゥカン・ブキツ(Kadukan Bukit)などスリウィジャヤ(Sriwijaya)王国の名が記された4碑文が目される。いずれも古マレー語をパッラヴァ文字で記しているが、その中のタラン・トゥオ(Talang Tuo)碑文には、密教系大乘仏教の用語が記されている(岩本 1973, 261 頁)。唐の義浄は672年から695年まで東南アジア経由でインドを往復したが、そのうち約10年はスリウィジャヤに滞在して訳経活動を行った。そしてスリウィジャヤには千人以上の仏僧がいたことを記している。

このようにパレンバンを一つの中心とするスリウィジャヤは、7世紀後半には仏教王国を形成していたことは間違いない。実際、スグンタン丘(Bukit Suguntang)からは8世紀頃と推定される石仏も出土しているが、明確な

仏教寺院建築は残っていない。しかし観音菩薩像が発見されたことがあるサランワティ(Sarangwati)遺跡では、多数の土製ミニチュア塔とその銅製型が出土している (Hasan 1984, 16 頁)。高さ 10cm に満たないこのミニチュア (写真 11) は、主塔の裾に 8 基の小塔を配した形状をなすが、いずれも頂部が長短の円柱状になった釣り鐘型をしている。7 世紀に修復されたとされる、スリランカのアヌラダプーラのトゥーパーラマ塔に最も近い形状である。

このスリウィジャヤの勢力は 8 世紀になると、マレー半島北部まで勢力を伸ばしたばかりか、ジャワ島中部に存在していたシャイレンドラ (サンスクリット語で「山の王」の意味) 王朝と婚姻などで結合するようになる。そして多くの仏教建築を、中部ジャワで築いた。

中部ジャワのインド系建築物は、ヒンドゥ教シヴァ派の寺院として建てられたディエン(Dien)高原寺院群やウンガラン山中腹のグドン・ソング(Gedong Songo)が最も古く、7 世紀後半と考えられている。いずれもパツラヴァ様式の建築であるが、共に高山の山頂近くに立地している。これらはサンジャヤ(Sanjaya)王朝とも呼ばれた初期シャイレンドラ王朝によって建立された。

しかし 8 世紀中葉 (チャンガル(Canggar)碑文の 732 年以降、リゴール(Ligor)碑文の 775 年以前)、スリウィジャヤと結合したシャイレンドラは仏教化し、以後 1 世紀の間、次々と石造仏教寺院をクドゥ盆地とプランバナン(Prambanan)平野に建立していった。

シャイレンドラが築いた仏教寺院で創建年が判明している最古の例は、778 年のカラサン(Kalasan)寺院である。またスウ(Sewu)寺院も 782 年に創建されたと考えられている (千原 1973, 205 頁)。

千原大五郎は、7 世紀から 10 世紀初頭まで続く中部ジャワでのインド系文化時代 (中部ジャワ期) を、建築様式から 4 期に大別している (千原 1983, 121-132 頁)。そしてボロブドゥールに先行するものとして、カラサンとスウを挙げた。必然的にボロブドゥールの建立を 790 年頃に想定した。年代の検討は後述したいが、ボロブドゥールに先行する仏教寺院が決して多くないことは注意する必要がある。

B 構造

ボロブドゥールの構造 (図 8) についてはすでに多く報告されているので、ここでは要点のみを 1970 年代の修復工事の専門委員でもあった千原大五郎の著書(千原 1973, 83) から要点のみを記したい。

ボロブドゥールは自然の丘の上に人工盛り土を築き、

それを安山岩切石で覆った構造である。そのため内部空間を全く持っておらず、この点が中部ジャワのほとんどの寺院とは全く異なっている。方位に沿った形で各辺に張り出し部を持つ二重の正方形を基壇とし、その上に次第に小さくなる同形の 5 段の方形段を載せる。この方形段各段の間は回廊となっており、内側の本体壁及び外側の欄楯はレリーフパネルで覆われている。また欄楯には外向けに 432 の龕を設け、仏像が安置されている。

第 5 方形段の上面には 3 段の低い円形段が載るが、形状は隅丸方形に近い円形から真円形に徐々に変化している。円形段各上には釣り鐘型の小塔 72 基が並び、内部には仏像が納められている。この小塔には小窓が設けられているが、上段にいくに従って窓空間は小さくなる。さらに中央に小塔と相似形の大塔が据えられるが、これには窓はなく内部には何も入っていなかった。

各段の規模は、次のとおりである。

	大きさ m	高さ m
第 1 基壇	118×118	1.50
第 2 基壇	113×113	2.14
基壇高計		3.64
第 1 方形段	92×92	2.18
第 2 方形段	83×83	3.86
第 3 方形段	75×75	2.82
第 4 方形段	67×67	2.47
第 5 方形段	59×59	2.38
方形段高計		13.71
第 1 円形段	径 54	1.84
第 2 円形段	径 41	1.84
第 3 円形段	径 28	1.84
円形段高計		5.52
中央塔	径 13	18.39
総高		41.26

以上の数値を見ると、平面規模は第 1 基壇と第 5 方形段の間で 64%になっており、また方形段の高さの辺長に対する割合は 15%である。さらに第 5 方形段までの高さは総高の 4 割程度である。つまり現在の側面の姿は、上面が広い台形の上に中央塔も含めた小塔が多く載る形である。自然丘陵そのものが周囲より 10m 程度の比高をもっていることもあってかなり遠方からも識別できるランドマークであることは確かだが、構造体としての形状は垂直方向より水平方向が大きく強調された状態である。

良く知られているように現在の基壇の背後には、隠れ

た基壇がある。その幅は、方形段の傾斜がそのまま地上に達するような傾斜に近い。ここに彫られたレリーフが未完成であったことから力学的要因による設計変更と考えられていたが、それは1970年代の修復作業で実際に崩壊状況が現れたことで確認された。さらに第1円段以上が当初現在とは異なった姿で設計されていたことも、20世紀初頭のオランダの修復の際に指摘されている。

従って当初の設計はもう少し異なっていたことは確かだが、方形段部分は変わっていない。そのため、時期的に近く内部に空間を持たない共通点がある、アヌラダプーラの大塔群のような大きな半球形やシュリクシェトラの円錐形が当初の形態だったとは考えられない。

C レリーフと仏像

上述のように方形段の4回廊はレリーフで埋め尽くされ、方形段欄楯に432体と円形段に72体の仏像が安置されている。これらもすでに多く指摘されているが、要点をまとめてみよう。

レリーフは合計1,460面の方形パネルとして彫られており、その内容は異論もあるが、概ね次のような経典に依拠している。

位置	部分	パネル	典拠
隠れた基壇	外面	160	分別善悪応報經
第1回廊	主壁 upper	120	方広大莊嚴經
	主壁 lower	120	本生譚・譬喻經
	欄楯 upper	372	
	欄楯 lower	128	
第2回廊	欄楯	100	
	主壁	128	大方廣仏華嚴經入法界品
第3回廊	主壁	88	
	欄楯	88	
第4回廊	欄楯	84	
	主壁	72	普賢菩薩行願讚
総計		1460	

本生譚とはジャータカ説話で、ミャンマーのバガンあるいはバゴー(Bago)の仏塔や寺院基部には土製や施釉パネル製のものが見られる。また華嚴經入法界品とは、善財童子が各地の神仏を訪ねる話である。

これらレリーフの構成については当然仏教的な解釈が可能だが、ここではそれに立ち入らない¹²⁾。問題とすべきは、芸術的にも極めて優れたこのレリーフの下絵が、どのような文化的背景で描かれたのかという点である。

神仏や主要登場人物の表現がインド的であることは間違いない。それぞれの経典は主役の装飾表現法と共に伝来したと思われるからである。問題は、付加的な要素である器物などである。多く指摘されているように、本生譚には船があちこちで描かれている。しかしそれらのほとんどは船外浮材(アウトリガー)を両側面に付けたもので、一般にはオートロネシア語族特有のものとしてされている。また華嚴經部分を中心に寺院建築もかなり見られるが、それは中部ジャワ各地に残るこの当時の寺院建築と酷似している。いずれもインドやスリランカのものとは考えられない。

しかし最も重要なレリーフは、寺院と共に崇拜の対象として描かれた塔(写真12)である。これは全て半球形になっており、アマーラヴァティのレリーフ、アヌラダプーラの塔、ブジャン石板に見られるものと基本的に同一である。というより、このボロブドゥール自体にある釣り鐘型の塔とは著しく異なっている¹³⁾。

このことは、半球形塔とは意識的に別なものを作ったことを示している。円錐形傘蓋部など確かにスリランカ様式塔からの変化と考えられるものの、それは仏教経典の説く塔とは異なった存在であることを製作者は意識していた可能性が考えられる。

次に仏像については、先学によりすでに次のように解釈されている。

位置	東面		西面		南面		北面		計
	阿シ	ユク	阿弥	陀仏	宝生	仏	不空	成就	
第1 方形 段	26	26	26	26	26	26	26	26	104
第2 方形 段	26	26	26	26	26	26	26	26	104
第3 方形 段	22	22	22	22	22	22	22	22	88
第4 方形 段	18	18	18	18	18	18	18	18	72
第5 方形 段	16	16	16	16	16	16	16	16	64
第1 円形 段	釈迦牟尼仏				32		72		

第 2 円形 段	釈迦牟尼仏	24	
第 3 円形 段	釈迦牟尼仏	16	

これらの仏像はいずれもグプタ朝のサルナート様式とされる坐像だが、それぞれ仏相認定の根拠は印相である¹⁴⁾。同定には多少の異説もないわけではないが、基本的に密教の金剛界マンダラにはほぼ則していることは間違いない(干瀉 1994、岩本 1973 など)。

それは正方形と円形を上下に使い分けた設計思想とかなり正確に対応している。しかしここで疑問が生じるのは、印相によって6種の仏像を識別しているにもかかわらず、第1～第4方形段と第5方形段では考え方が異なっている点である。法界説法印の毘盧遮那仏を方位と無関係とするなら、なぜ円形段に置かなかったのか。

あえて方形段の最上段に方位と無関係に毘盧遮那仏を設置したのは、方形段の数を5、また円形段の数を3とすることが前提であったためではないだろうか。即ち、中央塔も含めて奇数段での構成が、基本的な要件であったとするのが妥当だろう。

D 小結-建立年代について

ボロブドゥールには、築造時期を直接示す碑文はない。しかし隠れた基壇にはレリーフの配置を示す古代ジャワ文字が刻まれている。その字体の特徴は、他の碑文資料との比較から760年～847年の間に収まるとされる。

その前提のもとに千原大五郎は前述のように、築造開始を790年頃、一応の竣工を840年頃、そして最終的な完成を860年頃とした。それは778年にカラサン、782年にスウが創建されたこと、842年にはシャイレンドラの王女がボロブドゥールと推定される寺院に水田を寄進したとの碑文資料が存在するためである。千原は着工から完成までの間に、大小5回の変更があったとしている。

千原はヒンドゥ教寺院も含めて中部ジャワ期全ての寺院建築(チャンディ candi)について、ほとんどの遺構に残されている基壇の形態的特徴から8種類に大別している。そして碑文で確定しているカラサンなどの創建年代、ディエンとパッラヴァのマーマツラプラム(Mamallapuram)寺院群との比較などから、中部ジャワ期を次の4期に区分した(千原 1983, 121-132頁)。

第1期 ディエン前期(680年頃～730年頃)

第2期 ディエン後期=初期シャイレンドラ期(730年頃～780年頃)

第3期 シャイレンドラ盛期(780年頃～850年頃)

第4期 中部ジャワ末期(850年頃～920年頃)

この中で第2期は、高山に立地したディエン後期様式と平地に立地した初期シャイレンドラ様式が並立したとしている。またボロブドゥールは、842年頃の状態を第3期に、現在のものを第4期に入れた。

ここで気になるのは、建築史研究者である千原が提示した基壇の分類と、この4期区分が対応していない点である。つまり基壇の建築様式の差は、基本的に時期的変化ではなく同時存在の技術系統の差ということになる。そのため4期区分の根拠は、ディエン前期がマーマツラプラムとの形態的な類似性が述べられているものの、他はあくまで碑文資料の残る遺構の増築過程が中心になっている。

結局のところ明言はしていないものの、780年前後のカラサンとスウの創建年代に引きずられてボロブドゥールの創建を790年頃としているようである。だが10年ほど遅らせた根拠は明確ではない。また初期シャイレンドラ様式とするものは、732年のヒンドゥ寺院グヌン・ウキール(Gunung Wukir)と最初の仏教寺院であるカラサンの間の半世紀には、東部ジャワのヒンドゥ寺院バドゥ(Badut)しか資料がない。この第2期の終末頃に突然、仏教寺院が出現したことになる。

ミクシックは、760年頃から830年頃までを建立期間としている(Miksic 1990, 25頁)。これは恐らく、760年には中部ジャワのヒンドゥ教勢力が東部ジャワに移った可能性を示すディノヨ(Dinoyo)碑文と、842年の水田寄進という二つの碑文を根拠にしている。仏教寺院としてのプロトタイプが発見されていなく、カラサン・スウより遅くなく必然性はない。そのため、760年頃に中部ジャワで仏教化が確立した直後に、ボロブドゥールの建設が始まったとすることは、可能性があると思ふべきである。

なお筆者は中部ジャワ期の仏教寺院の屋蓋に載る小塔型構造物に、次のような形態差を認める。

1 釣り鐘型: ボロブドゥール、カラサン、ムンドゥ(Mundut)、スウ

2 卵形: パウォン(Pawon)、北プラオサン(Plaosan)、サリ(Sari)、(ロロジョングラン Loro Jonggrang)¹⁵⁾

3 多層型: ンガウエン(Ngawen)、南プラオサン

釣り鐘型はボロブドゥールに見られるような覆鉢が撫で肩の隅丸方形をして、裾が少し外反する形状である。上部には水平方向に広がった平頭が明瞭に認められる。

卵形は覆鉢が垂直方向に延びて下半部が少し内反傾向になる。平頭は小さくなり、傘蓋が変化した角柱との差が小さくなる。多層型は全く覆鉢の形状をとらないものである。

これらは現在の形状からの分類なので、創建当初のものとは不明である。少なくとも1から2への順序での変化が想定できるが、その場合パウオンとサリは千原編年とは一致しないことになる。

いずれにしてもボロブドゥールのような巨大建築の建立に、少なくとも半世紀以上の長い時間が必要だったことは確かである。5回の建設画期が確認されていることも、それを示している。そして重要なことは、中部ジャワのインド系寺院群の中にボロブドゥールの原形となったものや、あるいは名残を持つ同形式の遺構が見られない点である。つまりボロブドゥールは長い建立期間も含めて特別の存在であったことは間違いなく、その意味でカラサン・スウから機械的に遅らせる必要はないのではないか。初期シャイレンドラ期の資料の少なさから見ても、ミクシックの年代観により妥当性が感じられる。

5 インドネシアの石積基壇遺構

ボロブドゥールが仏塔として持つ形態的な特異性は明らかになったが、なぜ突然のように生まれたのだろうか。それを考えるには、インドネシア在来の石積基壇遺構について無視するわけにはいかない。

インドネシアの先史文化には、巨石文化と呼ばれるものが存在する。狭義には単体の巨石を用いた遺構を指し、メンヒルやドルメンあるいは舟形石棺や石像などに代表される。その他に多数の石材を用いた構造物がある。その顕著なものが石積基壇遺構である。年代的にはインド系文化と重複して、西暦紀元前後から15世紀頃まで長い時間幅があったこととされている。

A 原初的様相

前述のようにインドネシアでは紀元後4世紀頃からインド文化の影響を受けた古代国家が、ジャワ島西部などで誕生する。それらの要素を持たない遺構が原初的様相で、大別するとピラミッド型・斜面テラス型に分かれ、両者の統合型も存在する。

それらの代表的な例を見てみよう。

1) ピラミッド型-南スマトラの遺跡群

礫を積んで階段状ピラミッドを形成したもので、基本的に平地に立地する。単独の例は小さいものが多く、残存例は僅かしか報告されていない。

南スマトラ内陸のラハット(Lahat)に残る典型的な2例

を、ヒョープ(van del Hoop)が示している (Hoop. 1932, pls. 49, 63)

一つは、ミンキツ(Mingkik)遺跡である(図9)。川原石を積んで2段を築いたもので、頂部は石列で不等間隔に区分されている。その狭い部分には小さなメンヒルが2基残っている。法量は、次のとおりである。

	平面m	高m
第1段	8.5×7.5	1.5
第2段	4.0×3.5	0.7

平面形はやや長方形で方位に沿わず、メンヒルのある側は北東になる。

次の例は、サルンティン・サクティ(Sarunting Sakti)遺跡である(図10)。2層築造だが、第1段は少なくとも三方に堀(幅2.5m)を巡らせることで長方形プランを作り、内壁に河原石を積んでいる。その上の北東側に偏した部分にほぼ正方形の第2段が築かれている。これは全て石を積んでいる。

地山は傾斜しているが、第1段の上面は水平に保たれている。周囲の堀から考えても盛土をしているだろう。法量は次に示した。

	平面m	高m
第1段	7.5×6.0	1.0
第2段	2.3×2.5	0.7

この両遺跡は10km程度の距離しか離れず、地形的には北東は下流にあたる。この地方はパガールラム(Pagaralam)盆地と呼ばれ、石像や箱式石棺などの遺跡が密集している。この二つの石積基壇遺構とどのような関係にあるかは不明だが、石像には特徴的な戦士像が多い。描かれた銅鼓から、石像は西暦紀元後数世紀頃が想定される。

両遺跡は共にそれほど高さを持たず、大きな景観効果を与えることはない。そのためこのような規模の遺構は、さらに多く存在する可能性がある。

2) 斜面テラス型-グヌン・パダン遺跡

山腹の傾斜地や尾根を造成してテラスを複数築いたもので、最高地テラスに礼拝対象であるメンヒルなどが設置される。また聖山の頂上への方向をとる。テラスの造成用として自然石を積んだ壁が形成され、各テラスへの昇降のために階段が設置される。このような種類の遺構は特に、ジャワ島西部の山中で多く発見されているが、

他地域でも存在している¹⁶⁾。

ここではその代表例であるグヌン・パダン (Gunung Padang) 遺跡を見てみたい。

この遺跡については、かつて研究史と踏査成果を報告したことがあるが (坂井 1990)、その概要は次の通りである。

グヌン・パダン遺跡 (図 10) は、海拔 855m の高原に位置する。周囲の川から 200m ほどの比高を持つ独立した尾根上を造成して、下記のような 5 段のテラスを築いている (全長 118×40m)。

	広さ m	高 m
第 1 段	40×36×28×28	
第 2 段	22.3×25×24×18.5	5.0
第 3 段	18.5×18×18×18	0.75
第 4 段	22×20	0.6
第 5 段	17.5×19×16×19	1.0

全体としては広い長方形に近い第 1 段と、規模の似た正方形に近い第 2 段以降に別れる。両者の間には 5m の段差があるため、第 1 段からは直接第 2 段以降を見通すことはできない。

これらのテラスは玄武岩の柱状節理角柱を使って周囲を囲んでいるだけでなく、それぞれの内部にはさまざまな方形区画を設けている。各区画には石列の途切れた入り口があるが、内部は空間のままである。また各テラスの平坦面造成や階段形成も同じ石を積んでなされている。

最上位の第 5 段にはメンヒルが倒れており、また谷を挟んで「先祖山」と呼ばれる山並みを遠望できる景観がある。

各テラスの造成にはかなりの労働力が必要であり、特に第 1 段の造成は第 2 段との間の斜面を削って盛り土した可能性が考えられている。石材は全て谷底から運んでいるため、作業は決して簡単なことではない。また平面形状からかなり緻密な設計がなされていることも明らかである。

全体として日本の中世山城にも似たような景観を示しているが、周囲には作業量を可能にするような人口が居住できる平地は見えない。そのため一定度の距離からの労働力の移動が必要であり、かなり組織化された社会が背景にあったと想定できる。

この遺跡の年代を推定できる資料は、発見されていない。しかし表面調査ではインド系文化の特徴を示すものは発見されておらず、背景の社会とはヒンドゥ教や仏教

の原理を直接基礎にしたものでなかったことは明らかである。

3) 統合型-レバツ・チベドゥ遺跡

斜面テラス型の再奥テラスに、ピラミッド型が築かれたものである。全体がかなり大規模になるが、現在のところジャワ島西部の山中のみで確認されている。その代表例がレバツ (Lebak) 地方のバドゥイ (Baduy) 山中にあるレバツ・チベドゥ (Lebak Cibedug) 遺跡である。

この遺跡は、交通が不便なインド洋側斜面に位置するため探訪が難しく、1920 年代に発見されて以来踏査成果はヒョープ (Hoop ibid.) とハルワニ Halwany Michlob (Halwany 1993) しか発表されていなかった。しかし密林の中に存在するこの遺跡についてそれぞれが提示したスケッチ図は大きくイメージが異なっており、実態については江上幹幸の調査 (江上 2001) でようやく明らかになった。

レバツ・チベドゥ遺跡は、インド洋海岸から 30km 内陸で海拔 870m の高原地帯に位置する。川から比高 10m の平面ヒョウタン型をなす台地上 (約 100×50m) に展開している (図 11)。

遺構は大きく分けて、下位の二つの広場部分 (13×19.5m 及び 13×39m) と上位の方形基壇部分よりなる。主体をなす後者 (44×45m) は、下から石積みの方形前庭、4 段のテラスそして最上位の 9 段ピラミッドで構成されている。

広場部分や方形前庭そしてテラス上には、多くの方形石列やメンヒルが配置されている。特に上の広場には、2 段築造の方形石積み (基部 14.5×9m) が目立っている。そして東側再奥の 9 段築造のピラミッド¹⁷⁾まで、石敷の道が続いている。

このピラミッドは階段状に側面に石積みされた構造 (最下段 19×18.5m、最上段 5.5×4.5m、高さ約 6m) で、各段の四隅には切石のメンヒル (高さ 0.5-0.9m) が設置されている。また最頂部には柱状メンヒル (0.6×0.2m) が見られる。石積みは他の遺構と同様に垂直部分にのみなされ、平面部分には基本的に存在しない。

全体として遺構の配置は方位をかなり意識して形成されている、と江上は報告している。そのため最東奥に位置するピラミッド頂部からは、朝日を臨むことになる。またピラミッドから小さな谷を挟んだ東側の台地上には、さらにメンヒルや配石遺構が分布している。

このピラミッドが完全な盛り土なのか、それとも自然の高まりを加工したものかは不明である。しかし台地上全体をさまざまに造成したことは確かであり、高さ調整を維持する石垣として石積みは機能している。そして少

なくとも方位と方形を意識した設計がなされていることは間違いない。

前述のグヌン・パダン遺跡と同様に、この遺跡の築造も成熟した社会組織の存在が前庭であり、現在の隣接集落が近年の移住で形成されたことを見る時、その居住域は一定度の距離を隔てている可能性が高い。さらにヒンドゥ・仏教の様相は、ここでも皆無である。

江上はこの遺跡の築造を、隣接する山中に孤立して棲むバドゥイ人との関係で考えた。彼らは外部のイスラーム教徒との接触を基本的に拒み、自らの習俗の維持に現在でも強く固執している。しかし彼らには、16世紀のイスラーム伝来以前に平野部に栄えていたヒンドゥ・仏教文化の要素も見られない。焼畑耕作を基盤とする祖先崇拜が社会の根幹になっている。

レバツ・チベドゥ遺跡のあり方は、そのようなバドゥイ人の習俗と一致する部分がある。しかしこの遺跡自体は現在彼らの居住域ではなく、また信仰対象になっているわけでもない。江上はバドゥイ人の居住域の中で外部との接点になっている外バドゥイの集落を踏査しているが、そこではレバツ・チベドゥ遺跡に類似した施設を確認してはいない。

そのためバドゥイ人社会との関係を決定づける証拠は明らかではない。またこの遺跡の年代も、推定する決定的な要素は不明である。江上はこの遺跡をかつてのバドゥイ人の聖地の一つであったが、「外部からの圧力で耕作面積が減少し、人口圧を支えきれずにタブーに縛られた祖霊信仰を放棄して・・・祖霊信仰の要である聖地を維持する基盤を失った」のではないかと考えた。

それは基本的に妥当と思われるが、年代的な推定には遠い。ただ明らかなのは、単独で存在するピラミッド型やテラス型よりは新しいことである。

B ヒンドゥ・仏教伝来後の様相

インド文化の影響が明らかに認められる石積基壇遺構で、紀元後4世紀より確実に新しい要素があるものである。

1) プグン・ラハルジョ遺跡

プグン・ラハルジョ (Pugung Raharjo) 遺跡は、スマトラ南端のランブン (Lampung) 州東部のスカンプン (Sukampung) 川中流に位置する大規模な複合遺跡である (Haris 1979)。

スカンプン川に注ぐプグン川の右岸に展開するこの遺跡には、連結する3つの環濠と石積基壇遺構群がある。石積基壇遺構は大小計13基見られるが、中央の環濠の内側から東外側にかけて分布している。東端の環濠内には

中心に男根状メンヒル (長2.05m、径0.42m) を据える方形列石があるが、その近傍を含めて散在する石積基壇遺構との時期差がどのようであるかは判断することは難しい。

最大の6号基壇遺構 (第1段辺長約14×12m、総高6m 写真13) は東端の環濠外にあり、3層構造のピラミッド状をなし堀で囲まれている。構造は基本的に盛土による裁頭四角錐をなし、各層の基部にのみ人頭大の自然石を3段ほど積んでいる。この石積みは、盛土の崩落を防ぐ目的と考えられる。東面には第2層上まで達する石積みの階段がある。

この6号基壇遺構から150m南東に離れ環濠外の東端に位置する2段構造の7号基壇遺構 (第1段辺長8m) から、時期を示す重要な遺物が発見されている。

それが1957年にこの遺構の頂部で発見された、石製菩薩像 (高90cm 写真14) である。蓮華座上に坐り転法輪印を結ぶ総髪の菩薩は、宝冠を冠り、腕輪と首飾りそして4条の数珠帯 (upavita) を着けている。全体的に独自のスタイル¹⁸⁾を示しているが、装飾の特徴は13-14世紀頃のシンガサリ・マジャパイト (Singhasari-Majapahit) 様式とされる (Diskul 1980, 14, 36頁)。

なお東端部内で発見された陶磁片には、10世紀の広東西村窯鉄絵、13-15世紀の竜泉窯及び福建系青磁、15世紀の景德鎮青花が含まれていた (坂井 1995, 625-627頁)。またスカンプン川下流では、仏教文化が伝来したスリウィジャヤ時代の7世紀と考えられるパラス・パスマ (Palas Psemah) 碑文が発見されている。

この遺跡の石積基壇遺構は、遺構の構造そのものにはヒンドゥ・仏教の要素は全くない。その築造は、明らかにインド系文化とは無関係になされている。そのため6世紀以前の築造の可能性が考えられる。しかし菩薩像や出土陶磁片より、少なくとも仏教文化が開花していた13世紀まで信仰の対象となっていたことが知られる。本来、石積基壇遺構の頂部には、信仰対象であるメンヒルが設置されている。しかしプグン・ラハルジョの石積基壇遺構のどこからもメンヒルが発見されていない事実は、そのような仏教文化伝来後の役割を裏付けている。

従ってこのような遺構が、ボロブドゥールの形態を生み出す祖形であった可能性を考えることができる。

2) ジャゴ寺院・スクツ寺院

石積基壇遺構は、ボロブドゥール以後も、ジャワのヒンドゥ・仏教建築に大きな影響を及ぼし続けた。10世紀以降ジャワ文化の中心は東部ジャワのブランタス (Brantas) 川流域に移動して、東部ジャワ期と呼ばれる時代になる。この時代には次第に、寺院建築と石積基壇遺

構の融合が顕著になっていく。その代表例として、ジャゴ寺院とスクツ寺院を見てみよう。

ジャゴ(Jago)寺院は、東部ジャワのマラン Malang 近郊にあり、シンゴサリ王朝のヴィシュヌワルダーナ(Wisnuwardhana)王(在位 1248-68 年)の仏教徒としての墓廟である。1280 年頃に最初の建物が建立されたはずだが、現存する遺構はその後 1343 年に再建された可能性も考えられている(千原 1973, 280-289 頁 同 1983, 231, 232 頁)。

この寺院の最大の特徴は、下記のような略長方形の三重基壇そしてその上に建てられた本殿(屋根欠損)の位置が、いずれも後方に偏している点である(図 12)。

	広さ m	高 m
第 1 基壇	23.5×14	1.98
第 2 基壇	約 15×9.5	3.47
第 3 基壇	約 7.3×7.3	1.68
本殿	6.96×6.96	4.0 以上

第 2 基壇と第 3 基壇は、明らかに下位の基壇上の後方に位置している。正方形に近い本殿と第 3 基壇は相対的な位置のように見えるが、実際には第 3 基壇は前方に階段の突出部があるため下位と同様の偏在位置と言える。そして重要なことは、主軸が 15 度磁北より西にずれているため、本殿の背後の方向がジャワ島最高峰スメル(Sumeru)山の位置になることである。

本殿に安置されていたのは不空羂索観音像であり、他に毘俱底観音像など、全体に密教像が多く見られる。しかし遺構の設計思想は同心正方形を重視するインド的なものとは大きく離れ、むしろレバツ・チベドゥ遺跡のあり方に類似している¹⁹⁾。

このような複合型石積基壇遺構に類似した寺院建築は、パナタラン(Panataran)寺院主殿など 14 世紀のマジャパイト王朝最盛期に顕著に見られ、千原は東部ジャワ期復古様式と呼んでいる。

15 世紀前半の東部ジャワ期末期に建てられた寺院の代表例が、中部ジャワのソロ(Solo)の東 35km ほどに位置するスクツ(Sukuh)寺院である。この寺院はラウ(Lawu)火山の中腹海拔 910m の尾根上に、3 段のテラスを連続させる形で築かれた。各テラスそして第 3 テラスに位置する本殿の規模は、次のとおりである(千原 1973, 340-358 頁)。

	形状と広さ m	高 m
第 1 テラス	長方形 48×32	約 2

第 2 テラス	L 字形 48×35	約 2
第 3 テラス	逆 L 字形 55×52	約 2
本殿	略正方形 15×15	6

本殿(写真 14)は安山岩切石を段上に積んだ裁頭ピラミッド型をし、頂部には木造建築が載っていた痕跡があり、かつてリングが安置されていた。第 1 テラスからこの本殿まで石敷の参道が直線で延びているが、それぞれのテラスへ上がる階段はこの本殿の形状を模した門をなしている。

第 3 テラスに残る石造物には、ガルダや亀などヒンドゥー的な神像を出発としながら怪奇な表現方法が顕著であり、また性神崇拜レリーフも少なからず存在する。それはもはやヒンドゥー教というより、ジャワ神秘主義を基本としたとするのが妥当な状態である。

ただ重要なことは、次第に高くなるテラスを登り詰めた最奥にピラミッド建築があり、さらにその背景がラウ山の頂上である点である。この構成はジャゴ以上にレバツ・チベドゥ遺跡と近似している。特にピラミッド形態の本殿の様相を見れば、ほとんど同一の思想で建てられたと言わねばならない。

C 石積基壇遺構としてのボロブドゥール

巨石文化の山岳信仰の中で石積基壇遺構は、スマトラ島南部とジャワ島で発達した。インド系文化伝来以前にピラミッド型と斜面テラス型が成立していたが、その信仰は長く基層文化として維持された。そして中部ジャワ期から東部ジャワ期への流れの中で、インド系文化の在地化を経てピラミッド型と斜面テラス型が融合した統合型が誕生した可能性がある。

ボロブドゥールは、自然の丘の上に盛り土をしてそれを切石で覆ったものである。そして形態から仏教的要素を取り除いてみると、単純な裁頭四角錐をなしているのは明瞭である。しかも内部に空間はなく、明らかに外見を重視した設計で、丘陵上の立地からも山をイメージさせている。また四辺中央に階段がはっきりと設置されており、祭祀場である頂部に登ることが重要な要素になっている。

このような特徴は、ピラミッド型の石積基壇遺構と本質的に変わらない。現状で最も近い資料は、プグン・ラハルジョ遺跡の 6 号遺構になる。もちろん同遺構は各段の裾部に自然石を積んだだけであり、切石で全ての面を覆ったボロブドゥールとは大きな差はある。また段数もボロブドゥールの側面が 5 段に対して、同遺構は全てで

3段しかない。

しかしそれらは規模の差から生じた違いであり、どの方向から見ても同じに見える裁頭四角錐をなしていることは変わらない。この形状は、頂部で祭祀行為を行うことを前提にした人工の山であることを企図したと言える²⁰⁾。

まだ発見された資料は決して多くはないが、インド系文化渡来以前ではピラミッド型の石積基壇遺構はスマトラ南部に集中していた可能性がある。ここで誕生している。統合型の成立には、スマトラとジャワの文化の融合が想定でき、それはインド系文化の渡来以後である可能性は高い。

そのように石積基壇遺構の流れを見ると、次のようなボロブドゥールとの関係が想定できる。即ち、本来スマトラ南部に中心があったピラミッド型が巨大化する延長にボロブドゥールは位置した。仏教的要素を付与しながらピラミッド型のボロブドゥールが中部ジャワに誕生した結果、その影響を受けて本来テラス型しかなかったジャワに統合型が誕生するようになる。恐らく中部ジャワ期においては、レバツ・チベドゥのようなインド系文化国家とは別に並立する在来文化圏で発生した。しかし東部ジャワ期にインド系文化国家が在地指向を強めるようになると、インド系文化寺院までがジャゴなどのように統合型石積基壇遺構の要素を強めるようになっていった。

つまりボロブドゥールは、石積基壇遺構が先史時代から歴史時代まで継続して発展していく中で、とりわけスマトラ南部とジャワのものが融合する過程で決定的な役割を果たした、と考えられないだろうか。碑文研究からは、シャイレンドラ王朝は何らかの形でスマトラ南部に重要な拠点があったスリウィジャヤと密接な関係を持ったとされる。それはボロブドゥールを中心においた石積基壇遺構のそのような流れの理解と、大勢では齟齬はないと思われる。

なおボロブドゥールとピラミッド型石積基壇遺構の側面形状は、次のとおりである。

	第1段長A	頂部長B	方形壇高	B/A	C/A
ボロブドゥール	92	59	13.7	0.64	0.15
ミンキッ	8.5	4.0	2.2	0.47	0.26
サルンティン・サクティ	7.5	2.5	1.7	0.33	0.23
レバツ・チバドゥ	19	5.5	6	0.29	0.32
ブグン・ラハルジョ6号	14	—	6	—	0.43
スクツ本殿	15	6.8	6	0.45	0.40

ボロブドゥールが飛び抜けて扁平であり、また方形段の傾斜が急であることを示している。これは方形段上面を広く取ることを当初から意識していたためであろう。

6 アジア東部の古代海上交流と仏教伝播

ボロブドゥールで頂上に立つインドネシアで発達した仏塔と日本の特殊塔の間にどのような関係があるのか、この本論の中心課題について詳細に検討してみたい。

A 遺構の共通性

すでに見たように、アジアの仏塔は多様な発展を遂げた。ここで問題とする8世紀の時点では、仏教での中心的な礼拝対象は完全に仏像に移っている。しかし仏教寺院の象徴としての仏塔の役割は、むしろ各地で大きくなっていったとも言える。そのような状況の中で、建造物として共通する点を考え、また関連否定説に反論してみよう。

1) 形態と機能

頭塔・土塔・熊山石積遺構とボロブドゥールの形態について、斉藤忠が行った比較は次の通りである（斉藤2002, 281頁）。

斉藤は建造物としてのプロポーションを、次表のようにまとめた。

	ボロブドゥール	頭塔	土塔	熊山
基壇辺長m	111.5	25	56	9.2
高さm	31.5	7.5	8	4.0
高さ/辺長	0.28	0.30	0.14	0.43

この数値について、「いずれも広さの割合に低平であり、ことに頭塔は、ボロブドゥールの割合とかなり近似している。必ずしも偶然の一致ともみなされ難いものがある。」と斉藤は指摘した。

前述のように筆者は、基壇上の方形段の上下辺と高さの関係を比較した。それは次のようにまとめられる。

	第1段長A	頂部長B	方形壇高C	B/A	C/A	ボロブドゥール	上層頭塔	土塔	熊山
ボロブドゥール	92	59	13.7	0.64	0.15	92	24.8	46.6	7.9
ミンキッ	8.5	4.0	2.2	0.47	0.26	59	6.4	10.4	3.6
サルンティン・サクティ	7.5	2.5	1.7	0.33	0.23	13.7	6.8	7.4	3.2
レバツ・チバドゥ	19	5.5	6	0.29	0.32	0.64	0.26	0.22	0.46
ブグン・ラハルジョ6号	14	—	6	—	0.43	0.15	0.27	0.16	0.40
スクツ本殿	15	6.8	6	0.45	0.40				

第1段長に対する高さの比は土塔と近い。方形壇頂部

の辺はやはりボロブドゥールはかなり長い、これはやはり頂部構造物の差と考えられる。この数値だけを見るとばらついてるように見えるが、中国の代表的な楼阁式塔である大雁塔の高さ比は2.56である。密檐式も含めて同程度以上になり、基本的に1.0以下の高さ比になることはありえない。そのような水平方向に偏した構造の中で、上面をどのように利用するかという差でしかない。

実際、8世紀までのアジア各地の仏塔は、スリランカ、ミャンマー、中国などいずれも垂直方向に巨大化し水平方向に広がったものは極めて少ない。天に延びるものを指す「塔」という言葉のイメージも、すでに確立されていたはずである。

そのような斉藤の指摘も踏まえながら構造の特徴を考えてみると、まず内部に空間を持たない中実構造であることが共通する。龕はあくまで外から礼拝するもので、外面要素である。そのために基壇と方形壇の大きさに差が作られて、回廊状の役割を果たしている。これは中国系の仏塔には全く見られない点である。韓半島に多数存在する石塔の多くも内部に入ることにはできないが、それは素材として板石が使われたためであって、本来の形状が中に入れる中国の楼阁式や密檐式の塔であったことは間違いない。

つまりこれらの塔の形態にあるのは、サーンチー仏塔以来の周囲を巡って祈る、という行為を前提にした機能である。それは堂内での仏像への礼拝に比べ、多人数の要素が強い。レリーフや仏龕などがなく土塔も、基壇と方形壇は明確に分かれている。さらに土塔での人名瓦の奉納は、そのような礼拝行為との関係も考えられる。

そして重要なことは、重量感のある視覚効果である。それは山をイメージしやすく、山岳信仰との融合と関係していると言える。

2) 仏像・レリーフの共通性

上述のようにボロブドゥールは、仏像・レリーフの配置が極めて規則的である。その要点を再度示すと次のようになる。

- 1 仏像は垂直位置では、釈迦牟尼仏を上位とし、中位に毘盧遮那仏、そして下位に四方仏が配置される。
- 2 四方仏は、東面：阿シユク仏、西面：阿弥陀仏、南面：宝生仏、北面：不空成就仏となっている。釈迦牟尼仏と毘盧遮那仏は方位性を持たない。
- 3 仏像には菩薩像は見られず、隣接するムンドウ寺院のような三尊配置はない。
- 4 レリーフは、華嚴経入法界品（普賢菩薩行願讃を含む）を上位とし、中位にジャータカ・譬喩経

と方广大莊嚴経、そして最下位に分別善悪応報経となっている。

- 5 レリーフは内容の連続的展開を示すため、方位との関係は見られない。

それに対し、頭塔のレリーフの特徴は次のとおりである。

- 1 仏像表現と説話表現に大別できる。
- 2 仏像表現では毘盧遮那仏を上位とし、下位に四方仏を配置している。
- 3 説話表現では、ジャータカや善財童子歴参図などを第1段と3段に配する。
- 4 四方仏は、東面：多宝仏、西面：阿弥陀仏、南面：釈迦仏、北面：弥勒仏だが、第1段中央を除いて配置はあまり規則的ではない。第1段中央はいずれも三尊仏表現である。
- 5 第3段と第7段には仏像の背後に建物が描かれたものが多いが、第3段南面中央のみ二階建てに表現されている。

以上を比べると、ボロブドゥールと頭塔では次のような類似点がある。

- A 全体の配置が上位に仏像、下位に説話となっている（頭塔は規則性が弱い）。
- B 仏像配置は、四方仏と上位仏の構成になっている（個々の比定は異なる）。
- C 説話では、善財童子歴参図とシビ王本生が共通する（上下の位置は異なる）。
- D 共に4段で表現されている（ボロブドゥールはさらに円形段と隠れた基壇がある）。

一方、明らかな相違点も見られる。

- A ボロブドゥール仏像はあくまで単体で菩薩像は存在しないが、頭塔では三尊表現が主体である。
- B 頭塔は南面を重要視する傾向がある。

これらの点を総合的に評価すると、まず大前提として全体の構成で他に比較しうる存在がほとんど見当たらないことを注意すべきである。即ち、立体的に仏像と説話レリーフが表現されている状態は、極めて類似していると言わねばならない。華嚴経が共通するとはいえ、このように基本的部分に類似点が多いのは、設計思想そのものがかなり近かったからだろう。特にシビ王本生のようなジャータカの表現も、そのことを示している。

ただしそれぞれ依拠した仏典や設計思想は外来のものであっても、実際の製作は地元の伝統をもとになされた。頭塔の建物表現が天平期の寺院建築に近似していることは、その現れである。そのため三尊表現のような差があり、また頭塔の南面重視はまさに東大寺との関係を意識したためと考えられる。

熊山石積遺構は龕しかないため比較できないが、似た形状の義城安平塔では西面の龕に残された仏像は阿弥陀仏とされている。四面に龕を設けたのは、四方仏の考えがあったからであり、類似要素と見ることができる。

3) ボロブドゥール類似否定説に対して

頭塔の発掘調査報告書の大部分を執筆した岩永省三氏は、頭塔などの起源に関する東南アジア説（「南方系説」）を次の各点を根拠として否定した（奈文研 2001, 165-166 頁、岩永 2002, 30-32 頁）。

- 1 菩提僊那は「段台状基壇」を持たないインドの出身者であり陸路唐へ来たと推定されるため、東南アジアの「段台状基壇の塔」についての知識を持っていなかった。
- 2 菩提僊那と仏哲の来日は736年で、土塔の造営開始と考えられる727年より後になる。
- 3 ボロブドゥールの方形部分はストゥーパを乗せる基壇だが、頭塔の方形部分は塔身で意味が異なり、また瓦の有無が大きく違う。
- 4 ボロブドゥールの築造年代は頭塔よりも遅れ、また同様の仏塔の類例がない。

1と2の渡来者の問題については後述するが、岩永氏は別の部分で「行基の場合、(中略)中国を突き抜けて天竺を意識していた可能性すらある」と述べている（同書170頁）。インドには「段台状基壇」はないのだから、行基が何を意識していたかは問題がある。

3はすでに見たように、ボロブドゥール方形部分は装飾のない最下層2層と仏龕やレリーフで飾られた5層部分に分かれている。確かに方形段は、小塔群が並ぶ円形段の下に位置しているが、そこに多数の仏像やレリーフがあり、参拝者が巡ることを前提に築かれている。このような部分も「基壇」とするならば、サーンチー第1号仏塔の半球形下位に設けられた欄楯を持つテラスも同じことになってしまう。

岩永氏は土塔も含めて方形部分を「塔身」と呼び、「基壇」と区別している。しかしどのような名称で呼ぼうが斉藤が指摘したような前述のプロポーションの類似性は事実である。岩永氏が土塔や頭塔の源流と考える中国の「磚塔」に、似た形状の「塔身」があるのだろうか。

瓦の有無については、他文化の建築物受容の過程で起こりうることとして註では決定的要因からは自ら引き下げている。

4は岩永氏が最も強調する要因だが、これもすでに見たようにボロブドゥールの築造年代は研究者によって大きな幅があり、またどの説を見ても少なくとも半世紀以上かけて築造されたと考えられている。築造開始前には

設計構想の期間が当然あり、頭塔の築造時期と重なるとするのが自然である。

また類例が少ないことは確かだが、ジャワの仏教化が8世紀前半のある時点で急速に起きた事実を見る必要がある。カラサンやスウの祖形は現在インドネシアでは確認されておらず、スウはバングラデシュのパハルプール(Paharpur)との関係が考えられている(千原 1983, 119 頁)。そのような中でボロブドゥールに限れば、ピラミッド型の石積基壇遺構がシャイレンドラ王朝と関係のあるスマトラ南部に存在する。中でもプグン・ラハルジョ遺跡のように仏教文化と融合した石積基壇遺構が存在したことは確かである。今後も類例が新たに発見される可能性は否定できない。

なおこの報告書で上層頭塔の復原案(図13)を示した浅川滋男は、「方形階段状遺構の壁面に多数の仏龕を配し、その中央に円形(八角形)の伏鉢を配する姿は、立体曼荼羅とでも表現すべき建築物であり、(略)、ボロブドゥールなど南方系の方形段台型仏塔とめざすところは近似している」と述べている(同書123頁)。

B 南海経由の仏教伝来

以上のようなボロブドゥールと日本のピラミッド型塔の類似関係が偶然でないとするならば、当然仏教の伝来経路にそれが現れねばならない。現在の東南アジアの仏教は直接大きな影響を及ぼしたスリランカも含めて、大乘仏教とは異なった上座部仏教である。しかし、ボロブドゥールの時代のジャワ仏教は密教も含んだ大乘仏教であり、中国にも影響を及ぼしている。この事実はすでに仏教史研究の中では少なからず語られているが、そのような研究を整理してみたい。

1) 東南アジアと中国の交流

東南アジア経由でインドを訪ねた中国僧の嚆矢は、法顕(337-422)である。西域経由の往路の後、帰路にスリランカを経て413年ジャワに渡っている。その旅行記『仏国記』には、ジャワで一般的な宗教はヒンドゥ教で仏教はない、と記している(田村 1994, 171 頁)。これはタルーマヌガラ関係の碑文に示される状況と一致している。

次に知られているのは、すでに述べた義浄(635-713)である。阿部慈園は義浄の著名な著作『南海帰寄内法伝』と『大唐西域求法高僧伝』をもとに、往復共に東南アジア経由した旅行を、次のように整理した(阿部 1995, 76-80 頁)。

671年 広州より出発

672年 スリウィジャヤに半年滞在後、東インドのタームラリプティ到着

674年 ベトナム僧大乘灯と共にナーランダ(Nalanda)僧院到着

685年 タームラプティより出発しスリウィジャヤ経由で帰国

689年 スリウィジャヤへ出発

695年 スリウィジャヤより帰国

このように義浄の旅程には、スリウィジャヤが大きな要素を占めている²¹⁾。それはここが季節風の変換点という地理的な要衝であったばかりでなく、既述のように千人の僧侶がいる仏教国家だったからである。特に最後の7年間の滞在は経典の翻訳が目的であり、サンスクリット語から中国語への翻訳には、スリウィジャヤの言語「崑崙語」(古マレー語)が欠かせなかったからである。

その結果、『大方広華嚴経』『根本説一切有部毘奈耶』『金光明最勝王経』などを訳出した。華嚴経はボロブドゥールのレリーフの重要な主題になっており、金光明最勝王経と共に東大寺を中心とする奈良仏教の中心経典になったことは周知のとおりである。

また義浄の記録には、当時インドを目指した8人の韓半島からの僧が記されているが、6人が新羅、2人が高句麗出身だった。

このように華嚴宗の確立に大きな役割を果たした義浄にとって、スリウィジャヤは多大な影響を受けた地域とも言える。「唐の僧でインドに赴いて仏法を学ぼうとする者は、ここに一兩年滞在して、その法式を習った後にインドに赴くがよい。」と、義浄は記している(岩本 1973, 261頁)。上記の韓半島出身の僧たちもスリウィジャヤを経由しており、2人はスマトラで没している。

そのため8世紀までに唐で確立され新羅に伝えられた華嚴仏教には、スリウィジャヤでの仏教思想が少なからず混在した可能性は十分考えられる。

次に密教成立過程の問題がある。

唐で8世紀前半に確立した密教をもたらしたのは、716年に西域から渡来した善無畏(シュパッカラシンハ Subhakarasiṃha)と並んで、720年に東南アジアより来航した金剛智(671-741 ヴァジュラボーディ Vajrabodhi)と不空(705-774 アモーガヴァジュラ Amoghavajra)の役割が大きい。前者が北インドで確立した大日経系の密教をもたらしたのに対し、後者は南インドで成立した金剛頂経系の密教を伝えたとされる。

南インド出身の金剛智は、スリランカ生まれとも推定される不空と718年にジャワで出会ったとの伝承が『貞元新定釈教目録』に記され、金剛智が唐への来航以前にスリウィジャヤに立寄ったことが『宋高僧伝』にある。この伝承について岩本裕は否定的だが、干潟龍祥は可能

性を肯定すると共にヒンドゥーが支配的だった8世紀初頭のジャワでも仏教が全くなかったとは言い切れないとした(干潟 1994, 372頁)。ただ岩本も前述のように684年のタラン・トゥオ碑文に「金剛身」という用語が記されていることから、スリウィジャヤには密教が入っていたと考えている。田村隆照は、史料の不一致はあるものの不空が「14歳ではじめて金剛智と会ったとするジャワでの記事が、史実とも合致するかに思われる」とし、さらに続けてシャイレンドラ関係のリゴール碑文(775年)・カラサン碑文(778年)・クルラッ碑文(782年)のいずれにも密教関係の菩薩名が記されていることを指摘している(田村 1994, 172-176頁)。

南伝密教の系譜を考えると、不空が743年に渡航したことからも、スリランカが存在が重要になってくる。佐々木教悟によれば、スリランカでの密教史の概要は次のとおりである(佐々木 1973, 80-91頁)。

スリランカには前3世紀には早くも上座部仏教が伝えられ、アヌラダプラのマハー・ヴィハーラが拠点となった。その後3世紀に大乘仏教が南インドから伝来し、アバヤギリ・ヴィハーラを根拠地とするようになった。法顕は410年頃から2年間、そのようなアバヤギリ・ヴィハーラに滞在した。

7世紀末頃に南インドのアマラーヴァティ周辺で成立した金剛頂経は、金剛智によって8世紀初めにアバヤギリにもたらされた。これはアヌラダプラの政権が南インドのパッラヴァ朝と深い関係があったことにも起因しているようである。そして741年には不空はスリランカに至り、そこから多くの密教経典を唐に持ち帰っている。航海における季節風の問題もあり、この時のスリランカ往復に際して不空が中部ジャワに立寄った可能性も十分ありうる。

このようなスリランカと中部ジャワやスリウィジャヤとの関係は、7世紀に修復されたトゥーパーラマ塔とパレンパン出土のミニチュア塔そしてボロブドゥールの塔の形状類似からも理解できる。

一方、密教の最初の誕生地とされる東インドについても、パーラ朝下のナーランダでシャイレンドラの碑文が出ていること、またボロブドゥールの仏像がサルナート様式であることから、深い関係が想定される。

そのような状況から中部ジャワの密教痕跡を探してみると、ボロブドゥールに接するムンドゥ寺院のレリーフに表現されている八大菩薩が注目されている。このレリーフと本堂内の菩薩像を詳細に調査した松長恵史は、それを金剛智と不空がそれぞれ漢訳した経典の記述と酷似していることを指摘した(松長 1994, 216-217頁)。

もちろんボロブドゥールの各仏像のあり方そのものが、密教によるものであることは多く論じられている。早く岩本裕は五仏を金剛界の五禅定仏の立体的表現とし（岩本 1973, 289-290 頁）、田村隆照は密教系五仏とし（田村 1994, 178-179 頁）、干潟龍祥はボロブドゥール全体を立体羯磨マンダラと考えた（干潟 1994, 393-394 頁）。また石井和子は、不空の訳した「初会金剛頂経」とボロブドゥールの関係を詳細に検討し、シャイレンドラ王朝が積極的に密教を受容したことを述べている（石井 1992, 11-14 頁）。

以上により、唐での華嚴宗及び密教の成立には、スマトラとジャバが大きな役割を果たしたことは明らかである。

2) 奈良仏教と東南アジア

では、そのような唐での新しい仏教は、どのように日本に伝来したのだろうか。

まず、遣唐使の帰国を中心として年代的に明らかな 8 世紀の唐から日本への交通（上田 2006）を整理すると、次のようになる。

義浄は 695 年に帰国し、713 年に死亡するまで長安で訳経を継続した。義浄が訳した華嚴経や金光明最勝王経は、養老 2（718）年に帰着した遣唐使多治比県守に同道し帰国後大安寺に入る道慈が招来した。道慈は長安の西明寺で学んだが、晩年の義浄はそこにも来たと言われている。

ちょうどその前年の養老 1（717）年、行基の布教活動に対する禁令が出されている。そして 10 年後の神亀 4（727）年、行基は大野寺土塔を着工した。

すでに見たように、土塔の設計思想がそれまで日本にあった仏塔の概念と全く異なっていることは誰もが認めている。必ず外来思想が、行基に伝わっていたはずである。行基と外来の新仏教思想の可能性を考えると、第一に出てくるのは親族であった道昭である。長安で玄奘に学んで 661 年に帰国した道昭は、飛鳥寺に在住して 700 年に死亡した。行基は 691 年から慶雲 1（704）年まで飛鳥寺にいたため、道昭の影響を大きく受けたことは間違いない。

その後行基は故郷の和泉国大鳥郡へ帰り、民間布教を行い、また寺院建立活動を始める。神亀 4（727）年の大野寺建立まで、9 カ寺を建立している（井上編 1996: pp. 20）。道昭からの影響だとするならば、なぜそれまでの造寺活動で似た塔を築かなかったのか。布教禁令 6 年後の養老 7（723）年、三世一身法の発令により農地の開墾活動が奨励されると、行基は神亀 3（726）年の大鳥郡檜尾池と隣接する寺の造営を行っている。これ以降、行基の布教土木活動は政府の政策と一致するようになり、やがて天平 3（731）年行基の高齢弟子の出家が公認された。

つまり神亀 3 年以降、行基の活動はしだいに政府から奨励されるようになっていった。そのため官寺である大安寺に行くこともでき、道慈から新しい仏教思想を得ることができたのではないだろうか。その直後に近隣地で行った大野寺土塔の造営は、大門池とセットになった築造である。集団礼拝が可能というピラミッド型仏塔は、記念碑の意味で造営されたと考えられる。

この経緯で伝わったのは、義浄が招来した華嚴系の思想であり、そこには彼が長く滞在していたスリウィジャヤの状況が付加された可能性は高い。

次に頭塔と熊山石積遺構の問題である。

天平 8（736）年、遣唐使中臣名代の帰国船第 2 船で、婆羅門僧正菩提僊那（ボーディセナ）と林邑僧仏哲が来日し、大安寺に入った。

没後の伝記とされる『南天竺婆羅門僧正碑並序』には、唐への渡来の時期や経路ははっきりとは記されていない。南天竺を南インドと理解できるのかも不明である。ただ同行者の仏哲は、林邑僧と明記されており、唐の領域である北部ベトナムに接するチャンパ出身であることは確かだろう。唐での菩提僊那と仏哲の関係は、少なくとも同行して日本に来るほどのものだった。そのため、菩提僊那が海路東南アジア経由で、唐へ来た可能性はありうる。

後に天平勝宝 4（752）年、大仏開眼供養で菩提僊那は開眼導師として仏哲と共に大きな役割を果たす。また行基とも交流が深く、天平宝字 4（760）年に没した時、行基が養老 2（718）年に建立した登美院（霊山寺）に葬られている。

菩提僊那は華嚴経を諳んじると共に、「呪術」に巧みだったとされる。これは同じ遣唐使船の第 1 船で帰国した玄ボウにも言われている表現である。

723 年に金剛智が金剛頂経を、725 年には善無畏が大日経を漢訳している。前述のようにそれ以後、唐の仏教は密教化が進んだ。この「呪術」とは、密教的な修法を指していると考えてよいだろう。つまり、菩提僊那の来日は奈良仏教の密教化の最初の節目だったと見ることができる。

大仏開眼の年に、東大寺の実忠は二月堂を建てた。今日まで続くそこでの修二会は、この時から始まったと言われる。闇夜に大松明が駆け抜ける修二会のあり方を、斎藤忠は「かなりインド的な行事の要素が含まれている」とした（斎藤 2002, 281 頁）。密教的な雰囲気が濃厚だが、それは菩提僊那が伝えた可能性がある。

だが本格的な密教の唐への伝来は、前述のように不空のスリランカ往復（743-746 年）以後となる。その密教

の情報日本へもたらされた可能性が高いのは、天平勝宝5(753)年の遣唐使大伴古麻呂の帰国時である。

すでに天平16(744)年、甲賀寺で毘盧遮那仏の築造が開始され、翌年に行基は大僧正に任ぜられ協力を求められていた。そして行基が没した3年後に大仏は開眼された。この遣唐使船の帰国は、その翌年のことである。

この時来日したのが、鑑真一行だった。揚州大明寺にいた鑑真は742年以来たびたび日本への渡航を試み、ようやくこの時に目的をかなえたことは良く知られている。注意すべきは『唐大和上東征伝』によれば、鑑真の随行者にペルシャ人などと共に崑崙国人の軍法力が入っていたことである。崑崙は指す場合もあるが、西域を義浄が用いたようにマレーあるいはジャワを意味する用法もある。唐代の揚州が広州と並んで東南アジアとの交流が深い港だったことを考えると、この人物はジャワから来た可能性もある。

阿部龍一は、天平勝宝8(756)年に死んだ聖武天皇の四十九日忌に金剛智の袈裟が納められたことから、「朝廷が金剛智によって翻訳された密教経典主体の聖經類に並々ならぬ関心を寄せていたことを示している」と記し、この時点ですでに密教がかなり伝来していたことを述べている(阿部2004, 110頁)。

鑑真一行渡来の7年後の天平宝字4(760)年、実忠は良弁の目代として造東大寺司の中樞を担っているが、前述のように下層頭塔の着工はこの年と考えられている。そして天平宝字8(764)年、恵美押勝の乱を経て、実忠は、神護景雲1(767)年に上層頭塔を築造した。

下層頭塔は仏龕があったが熊山石積遺構に類似した3段であり、上層頭塔とはかなり異なっている。この設計変更が外来の新知识によっていたとするなら、公的な唐からの情報伝達の可能性は天平宝字5(761)年に帰国した遣唐使高元度しかいない。唐船で彼と共に来日したのは、39人の船師・水手だったとされている。この場合、彼らは船と共に唐へ戻っているはずだから、これ以外の情報源があったかもしれないが不明である。

実忠は東大寺の初代別当良弁の弟子であり、権別当として大きな役割を果たした。前述のように今日まで残る実忠の最大の業績は、二月堂の修二会である。また天平神護1(765)年には、良弁の命で東大寺南春日谷に堤・池を造るなど、東大寺に関係するさまざまな土木事業を統括していた。最大の官寺である東大寺でのそのような地位は、当然外来のさまざまな情報の入手を可能にする。

中世の『東大寺縁起』の中で、「実忠和尚、天竺人也、花嚴宗(「当寺碩徳事」『続群書類従』釈家)と記されていることに対し、斉藤忠は「史実とはみとめ難いとして

も、何かインドに関係のあったことを思わしめる」と考えた。そして「いずれにせよ、実忠の場合、南海を通じ、インドの文化をみちびき得る可能性のあったことは考慮してよい」と指摘した(斉藤2002, 281頁)。

スリランカ往復によって大きく発展した不空の密教思想は、上層頭塔建設までの間に上記のような公式ルートによっても伝来していたことは確かである。そして鑑真随行者の崑崙人が、ボロブドゥールの設計思想を伝えることも不可能ではない。

時期的に見れば、上層頭塔は百万塔と同じように道鏡政権下でなされている。根本誠二は、天平宝字6(762)年から天平神護2(766)年まで道鏡が多数の密教系の経典を東大寺写経所から借用していることを明らかにした(根本2006, 39-45頁)。あるいは百万塔の設置と同じように上層頭塔への改変も道鏡の意図が働いていたとするなら、新しい密教系の情報を得ることはさらに容易だったと考えられる。

7 まとめ-交流の意味

以上、奈良時代の特殊塔と呼ばれる頭塔など3塔と、インドネシアのボロブドゥールの関係を検討してきた。この検討結果を要約すると次のようになる。

- 1 頭塔などの3塔は、内部に空間を持たない階段状ピラミッド形態で、周囲を巡っての礼拝を基礎にした仏塔である。いずれも水平方向が長い形状をしている。
- 2 このような形態の仏塔は、中国はもちろんインドでも見られず、僅かにボロブドゥールとその影響を受けた東南アジアの仏塔数例にしか確認できない。
- 3 ボロブドゥールはスリランカ様式仏塔の影響を受けてはいるが、同様の形態は仏塔にはなく、インドネシア在来の巨石文化起源の石積基壇遺構が出發になっている。
- 4 8世紀前半に中部ジャワではシャイレンドラ王朝のもと、密教の様相を持つ大乘仏教文化が急速に発展して多くの寺院を建立した。ボロブドゥールは他に類例のない象徴的なモニュメントとして、760年頃に建立が始まり、完成までには少なくとも半世紀以上を要した。
- 5 華嚴宗確立に大きく貢献した義浄は、シャイレンドラと深い関係のあったスマトラのスリウィジャヤに長く滞在し、そこで影響を受けた。義浄の思想は土塔建立以前に大安寺道慈が奈良に伝えており、行基はその情報を知ることが可能だった

た。

- 6 唐の密教成立にはジャワが大きくかかわっており、その思想は菩提僊那や鑑真などを通じて頭塔建立以前には、確実に奈良にもたらされていた。建立者の実忠は、その最新思想を十分知りうる立場にあった。

以上の経緯により、日本の特殊塔3塔とボロブドゥールは類似することになった。それは遠距離の文化交流として容易に想定できるものではないかもしれないが、仏教思想の伝播過程を広く眺めるならばその「特殊」性の繋がりも、十分に理解できることである。

仏教文化が地域的な変容を強くしようとする直前の8世紀にあって、各地の文化は外来的な要素と在地的な要素の併存が問題にはならなかった。その状況は遺物では正倉院伝世品に明らかなおりが、遺構として見られるのが3塔とボロブドゥールだった。そこに我々は壮大な文化交流過程を確認することができる。

なお韓半島の類似塔の位置は、さらに検討されねばならない。また中継地である中国大陸にも、何らかの形で存在した可能性のある同様の塔が発見されることを期待している。

参考文献

- 阿部慈園 1995「天竺への旅・法顕・玄奘・義浄のたどった道」『インド・道の文化誌』春秋社。
- 阿部龍一 2004「奈良期の密教の再検討―九世紀の展開をふまえて―」『奈良仏教と在地社会』岩田書院。
- 足立 康 1933「頭塔に関する一考察」『古代文化研究』6 (1944『日本彫刻史の研究』に再収)。
- 1987『塔婆建築の研究』中央公論美術出版。
- Anom, I G.N. ed. 1997. *Hasil Pemugaran Benda Cagar Budaya PJP I (Lanjutan)*, Dep. Pendidikan dan Kebudayaan, Jakarta.
- Aung Thaw 1972. *Historical Sites in Burma*, The Ministry of Union Culture, Government of the Union of Burma.
- 東潮・田中俊明 1988『韓国の古代遺跡 1 新羅編 (慶州)』中央公論社。
- Casparis, J.G. de 1950. *Prasasti Indonesia I, Inscripties uit de Sailendra-tijd*, A.C.Nix, Bandung.
- 千原大五郎 1973『インドネシア社寺建築史』日本放送出版協会。
- 1983『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』鹿島出版会。
- Diskul, M.C. Subhadradis ed. 1980. *The Art of Srivijaya*, Oxford University Press – UNESCO.
- Dumarcay, J. 1977. *Histoire architecturale du Borobudur*, Publications de l'Ecole Francaise d'Extreme-Orient, Memoires Archeologiques XII.
- 江上幹幸 2001「レバッ・チベドゥ遺跡とバドゥイ族-西ジャワの石積基壇遺構-」『沖縄国際大学社会文化研究』5-1。
- 藤沢一夫 1962「土塔」大阪府教育委員会『大阪府の文化財』。
- 福山敏男 1932「頭塔の造立年代について」『考古学雑誌』22-6 (1982『寺院建築の研究』中に再収)。
- 19**「大野寺土塔」(1982『寺院建築の研究』中に再収)。
- 19**「熊山戒壇」(1982『寺院建築の研究』中に再収)。
- 布野修司 2003「仏教建築の世界史」『アジア都市建築史』昭和堂。
- Jacq-Hergoualc'h, M. 1992. *La civiliasaton de ports-entrepots du Sud Kedah (Malaysia) Ve XlVe siecle*. Paris.
- Halwany Michlob 1993. *Lebak Sibedug dan Arca Domas di Banten Selatan*, Suaka Peninggalan Sejarah dan Purbakala Prop. Jawa Barat, DKI Jakarta dan Lampung, Serang.
- Haris Sukendar 1979. *Laporan Penelitian Kepurbakalaan Daerah Lampung*, Berita Penelitian Arkeologi no.20, Pusat Penelitian Purbakala dan Peninggalan Nasional.
- 1985. *Peninggalan Tradisi Megalitik di Daerah Cianjur, Jawa Barat*, Pusat Penelitian Arkeologi Nasional, Jakarta.
- 2002. *Pugungraharjo Masa Lalu (Tinjauan Arkeologi Selayang Pandang)*, Jakarta.
- Hasan M. Ambary 1984. Penelitian Arkeologi yang Baru di Sumatera. *Amerta* no.7, Pusat Penelitian Arkeologi Nasional, Jakarta.
- Hoop, A.N.J.Th.A.Th. van der 1932. *Megalithic Remains in South-Sumatra*, W.J.Thieme & Cie, Zutphen.
- 堀池春峰 1955「婆羅門菩提僧正とその周辺」『奈良仏教と東アジア』。
- 1964「奈良頭塔について」『大和文化研究』9-5。
- 井尻 進 1924『ボロブドゥール』大乘社 (1947年に中公文庫として再刊行)。
- 林永珍 1989「三国時代 百濟 (ソウル地区)」『韓国の考古学』講談社。
- 井上 薫編 1996『行基菩薩千二百五十年御遠忌記念誌』行基菩薩ゆかりの寺院。
- 石田茂作 1931『日本考古図録大成 10 塔』東方書院。
- 1958「頭塔の復原」『歴史考古』2 (1969『日本の仏塔』に再収)。

- 1969 「土塔について」『日本の仏塔』。
- 1969 『日本仏塔の研究』講談社。
- 1976 『新版仏教考古学講座3 塔・塔婆』雄山閣。
- 1977 『仏教考古学論攷4 仏塔編』思文閣。
- 石井和子 1992 「ボロブドゥールと『初会金剛頂経』-シャイレンドラ朝密教需要の一考察」『東南アジア歴史と文化』21 東南アジア史学会。
- 板橋倫行 1929 「頭塔について」『文学思想研究』9。
- 伊東忠太 1900 「日本仏塔建築の沿革」。
- 1914 「塔」『建築工芸雑誌』。
- 1936 「印度建築史」『東洋建築の研究』下、龍吟社。
- 伊東照司 1988 『インドネシア美術入門』雄山閣。
- 1998 『ボロブドゥール』山川出版社。
- 岩本小百合 1996 「「シュリーヴィジャヤ」時代におけるクダール-いわゆるルンバ・ブジャン遺跡について-」『東南アジア考古学』16 東南アジア考古学会。
- 岩本 裕 1973 「インドネシアの仏教」『アジア仏教史インド編 VI 東南アジアの仏教』佼成出版社。
- 岩永省三 2002 「行基と頭塔に接点はあるか」『行基の考古学』塙書房。
- 秦弘變 1971 「所謂方壇式特殊形式の石塔数例」『考古美術』110。
- 1974 「所謂方壇式特殊形式の石塔」『考古美術』121-122。
- 金基雄 1976 『百済の古墳』学生社。
- 金禧庚 1982 『韓国の美術2 塔』悦話堂 Seoul。
- Krom, N. J. & Erp, Th. van 1927-31. *Archaeological Description of Barabudur*; M. Ni jhoff, The Hague (reprint 1993 by Rinsen Book Pub., Kyoto)。
- 近藤康司 2002 「大野寺を考古学する」『行基の考古学』塙書房。
- 熊山町教育委員会 1974 『熊山遺跡 岡山県赤磐郡熊山町史跡熊山遺跡緊急調査概報』。
- 1975 『熊山遺跡 岡山県赤磐郡熊山町史跡熊山遺跡石積遺構修理報告』。
- 松長恵史 1994 「チャンディ・ムンドゥーの八大菩薩」『密教体系10 密教の美術I』法蔵館。
- 松浦正昭 1997 「頭塔石仏の図像的解釈」『国華』1215。
- Miksic, John 1990. *Borobudur Colden Tales of the Buddha*, Peripulus, Singapore。
- 1998. From prehistory to protohistory, *The Encyclopedia of Malaysia vol. 4 Early History*, Archipelago Press, Kuala Lumpur。
- 持田信夫 1971 『ボロブドゥール』講談社。
- 森 蘊 1961 「頭塔の実測調査を了えて」『奈良国立文化財研究所年報1961年』。
- 1971 『奈良を測る』。
- 森 浩一 1957 「大野寺の土塔と人名瓦について」『文化史学』13。
- 村田次郎 1940 『支那の仏塔』。
- 1952 「中国の樓閣形塔婆の起源」『日本建築学会研究報告』18 (1989『中国建築史叢考-仏寺仏塔編-』中央公論美術出版に再収)。
- 1954 「中国仏塔の起源私解」『日本建築学会研究報告』27。
- 永山卯三郎 1930 「熊山戒壇に関する調査報告」『岡山県通史』。
- 奈良県教育委員会 2001 『史跡頭塔復原整備報告』。
- 奈良国立文化財研究所 1987 「頭塔の発掘調査」。
- 2001 『史跡頭塔発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第62冊。
- 根本誠二 2006 「道鏡と鑑真」『奈良・平安仏教の展開』吉川弘文館。
- 干瀉龍祥 1961 『ジャータカ概観』鈴木学術財団。
- 1994 「中部ジャワの密教-ボロブドゥール大塔の意味するもの-」『密教大系2 中国密教』法蔵館。
- 西村 貞 1957 「奈良頭塔の石仏」『仏教芸術』30。
- 沼田頼輔 1925 「備前熊山戒壇遺跡考」『考古学雑誌』15-6。
- 岡本敏行 1990 「大野寺の土塔復原」『千葉乗隆博士古稀記念日本の社会と仏教』。
- 近江昌司 1973 「備前熊山仏教遺跡考」『天理大学学报』85 天理大学学術研究会。
- 斎藤 忠 1938 「狼山麓の一遺構址」『昭和十二年度古蹟調査報告』。
- 1972 「わが国における頭塔・土塔等の遺跡の源流」『大正大学研究紀要』57。
- 2002 『仏塔の研究 アジア仏教文化の系譜をたどる』第一書房。
- 坂井 隆 1990 「西部ジャワの石積基壇遺構覚書-グヌン・パダン遺跡踏査記-」『インドネシア文化の構造とその展開』早稲田大学社会科学研究所。
- 1995 「マラッカ・スンダ海峽港市の陶磁器」『古代探叢IV』早稲田大学出版部。
- 堺市埋蔵文化財センター 2000 『史跡土塔-発掘調査説明会資料』堺市教育委員会。
- 2006 『史蹟土塔-文字瓦聚成』、堺市教育委員会。
- 佐々木教悟 1973 「スリランカの仏教」『アジア仏教史インド編 VI 東南アジアの仏教』佼成出版社。
- 佐藤小吉 1916 「頭塔山ノ石仏」『奈良県史蹟勝地調査会報告書(第3回)』。

佐藤正彦 1996 『北インドの建築入門』 彰国社。
 ————— 1997 『南インドの建築入門』 彰国社。
 佐和隆研 1971 『インドネシアの遺蹟と美術』 日本放送出版協会。
 関野 貞 1922 「南北朝時代の塔と健陀羅塔との関係」『建築雑誌』 427。
 ————— 1938 「西遊雑言-印度の仏教芸術に就いて-」『支那の建築と芸術』。
 Soekmono, R. 1976. *Chandi Borobudur, A monument of mankind*, Unesco.
 申營勳 1975 「陵旨塔の構成」『考古美術』 128。
 Stutterheim, W.F. 1929. *Tjandi Barabodoer; naam vorm, beteekenis*. (1956 Candi Borobudur: Name, Form, Meaning, "Studies in Indonesian Archaeology", M.Nijhoff, The Hague).
 田村隆照 1994 「ジャワへの密教伝播」『密教体系 10 密教美術 I』 法蔵館。
 田中重久 1943 「頭塔の研究」『日本に遺る印度系文物の研究』。
 巽淳一郎 1989 「頭塔の調査 第199次」『昭和63年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』。
 ————— 1991 「頭塔の構造とその源流」『季刊考古学』 34。
 内本勝彦 2002 「大野寺跡・大野寺瓦窯」『平成12年度市内遺跡立会調査概要報告』 堺市教育委員会。
 上田 雄 2006 『遣唐使全航海』 草思社。
 上田三平 1927 「頭塔」『奈良県に於ける指定史蹟』 1 内務省史蹟調査報告 3。
 梅原末治 1950 「古代施釉窯器の新資料-備前熊山戒壇出土品其他-」『史迹と美術』 202。
 ————— 1953 「備前熊山上の遺跡」『吉備考古』 86。
 横倉雅幸 1995 「ヤラン遺跡の発掘」『東南アジア考古学』 15 東南アジア考古学会。
 吉田靖雄 1987 『行基と律令国家』。

1) 中国の樓閣式系統以外の塔をストゥーパstupaと呼称することが多い。しかしストゥーパは仏塔と同義あるいは語源であることを考え、本論では全ての仏教系の塔を仏塔と呼ぶ。
 2) これらの中で「抜き取り」とは龕そのものが石仏と共になくなっていて、「なし」とは龕は残っているものである。
 3) シビ王本生は、シビ王が鷲に太腿の肉を与える北伝と両目を与える南伝があるが、残念ながらこのレリーフは摩耗が激しく識別はできない。
 4) 円筒型須恵器の基底部中央には焼成後の2カ所の穿孔がある。これは何らかの別の下部構造と接合させる目的だったかもしれない。
 5) 特に「高僧の墓」と想定しているが、極めて類例に限られた

この被葬者をもう少し限定しその造墓思想について明確にしなければ、それは理解しがたい。

6) 中世初頭の東大寺再建にあたって瓦生産地が熊山に選定された理由が関係するかもしれない。

7) ここで注意を要するのは、韓半島では形態的に類似した積石塚古墳が存在することである。ソウルで発見された百濟前期(3~5世紀)の石村洞古墳群(林 1989, 136-138頁、金 1976, 28頁)は3段築成の積石塚(石村洞3号墳:基壇長50.8×48.4m、高4.24m、同4号墳:第1段長24m、第2段17.5m、第3段13.2m、総高2.3m)で、特に4世紀の4号墳は規模や外見が義城塔や安東塔に近い。また5世紀初頭の高句麗の代表的積石塚である集安の將軍塚は、切石による7段築成のピラミッド(第1段長29.34m、総高11.28m)である。一方、陵旨塔の南東7kmにある8世紀後半の九政洞方形墳(一辺9.5m、高約3m)は、切石を3段積んで方形マウンドの周囲に巡らしている。1段しかないが、石積み状態は陵旨塔とほとんど同じであり、また腰石に十二支像が彫られている。もちろん義城塔に見られるような龕や仏像はこれらの古墳には存在しないし、逆に埋葬主体部は石積遺構では確認されていない。形態的に類似した石村洞と安東・義城は地域的にもかなり離れている。また百濟の仏教文化の中には石積遺構は確認されていないため、両者の外見的類似は偶然かもしれない。しかし陵旨塔と九政洞方形墳の時期や場所が、かなり近いことははっきりしている。

8) 同形同名の寺院がミャンマーのバガンに13世紀に建立されており、それより遡る可能性はある。

9) なおミャンマーでは他にベンガル湾に面したアラカン地方のムロハウ(Shitthaung)に残るシッタウン(Shitthaung)、フトウツカン・ゼイン(Htukkan-thein)両寺院の仏塔が興味深い。16世紀中葉から後半の建立だが、スリランカのポロンナールワ時代の仏塔の形状に似たもので、バガンの系譜を引くビルマ様式とは明らかに異なっている。

10) タイの仏塔はその後クメールの圧倒的な影響を脱した時に、12世紀以降北部のチェンマイ(Chienmai)地方を中心に極めて高い5層四角錐形をなして各層に3基の立像仏龕を設けた独自の仏塔が見られる。斎藤忠はこれを角形多層塔と名付け、中国の樓閣式塔からの影響を考えている。斎藤前掲書, 89-91頁

11) このような高い基壇を持つ仏塔の流れを汲むと考えられるのが、スマトラ中部のムアラ・タクス(Muara Takus)寺院のマリガイ(Maligai)塔である。四方に階段を持つ方形基壇の上に築かれたレンガ積のこの塔は、裾開きの下部・円筒状の中部・半球形の上部分かれ、頂部は円錐形に近い。蓮華座や柱状レリーフは確認できないが、全体の形状は似ている。この寺院跡は、10-11世紀の年代が推定されている。

12) 伊東照司は隠れた基壇については出典経典が不明の天界と地獄とし、また第4回廊主壁については、それまでと同じ華嚴経入法界品の続きであるとしている(伊東 1998, 52-53頁)。

13) ボロブドゥールの塔はパレンバン発見のミニチュアと同形である。

14) 釈迦牟尼仏: 転法輪印、毘盧遮那仏: 法界説法印、阿シユク仏: 触地印、宝生印: 施与印、阿弥陀仏: 弥陀定印、不空成就仏: 無畏印。

15) ヒンドゥ寺院ロロ・ジョングランに多数見られる宝珠(ratna)は、明らかに小塔から変化したものである。

16) 例えばジャワ島東部のアルゴプロ(Argopuro)山中のヤン(Yang)高原(千原 1982, 19-20頁)やスラウェシ南東部のクン

ダリ(Kendari)のラキデンデ(Lakidende)遺跡 (Anom 1997, 218頁)。しかし西部ジャワのチアンジュール(Cianjur)地方では、特に密度が濃い (Haris 1985)。

¹⁷⁾ 現状の最頂部は第8段だが第9段の存在が想定されている。

¹⁸⁾ なお近郊のボジョン(Bojong)で発見された巨石文化の「ポリネシア様式」とされる石像がある。これは大きな目を持ち、後頭部で鬘を付けたような頭部の表現でそのように見なされているが、台の上に胡座で坐っている姿勢や、装飾はないが首飾りや腕輪など、全体のイメージはかなりこの菩薩像に似ている。また背後の腰紐に差した短剣は柄が少し曲がった状態など、ジャワのクリスを思わせる。これもこの地域の巨石文化が歴史時代まで残存していたことを示す資料と言える。

¹⁹⁾ 欠損した本殿の屋根についても、バリ島の寺院に見られる軽量部材による重層寄せ棟であった可能性がレリーフから推定されている。

²⁰⁾ これは中米のピラミッドの外見的特徴とも共通している。

²¹⁾ 義浄のスリウィジャヤ訪問はパレンバン周辺で碑文が多く刻まれた時期と重なり、そのためスリウィジャヤ研究で彼の記録は第一級の史料となっている。またナーランダ僧院はスリウィジャヤ・シャイレンドラと関係が深く、両者の名を記した850年頃の碑文が発見されている。